
嘘つきは誰だ

七緒 湖李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきは誰だ

【Nコード】

N9030Y

【作者名】

七緒 湖李

【あらすじ】

ひよんなことから学校で大人気の女の子に告白することになった男子高校生の話。
告白後、彼女はなぜか積極的で・・・？
どこまでもフツの恋愛物語。

「安在さん。突然で驚くと思うけど好きです。俺とつきあってください」

高3の初夏。

受験生の俺がなぜ学年一美人と名高い彼女に告白しているのかという――。

「航平^{こうへい}、仇^うとつて仇^う！」

幼馴染みの泰治^{やすはる}に泣きつかれたのは今日の昼休みのことだ。

泰治とは幼稚園から一緒に小学生の頃まで毎日のようにつるんでいたが、中学からは疎遠になり同じ高校に進学したはずが、その頃には話をすることもなくなっていた。

高3で数年ぶりに同じクラスになって、また話をするようになった泰治が、ずっと密かに片想いを続けていたらしいと知って俺は単純に驚いた。

女の子に興味があつたのかと。

いや別に変な意味じゃない。

昔は女の子より仲間と遊ぶ方が好きだったという意味だ。

泰治が片想いしていたのは隣のクラスの安在雛姫^{ひなめ}。

俺も彼女は知っている。

茶色のふわふわの髪や肌の白さは異国の血を引いているせいだとか、そのせいかスタイルがよく特に胸がでかいだとか、これからの体育

の授業が水泳に変わるのが楽しみでならないだとか。

ともかく男の邪心……ではなく憧れの彼女の彼女は文句なくきれいだ。しかも彼氏がいない。

とくれば男が放っておくはずもなく彼女はすこぶるモテていた。

泰治もその一人だったようだ。

またすごいところに手を出したなと思いつつも俺は尋ね返す。

「仇？」

「見下すような顔されて無理って——ひどくね？あんな子だと思わなかった。男の純情踏みにじりやがって」

屋上で食後の苺ミルクを飲んでいた俺は、隣にいた巽と顔を見合わせる。^{たつみ}

「泰治、安在が告ってくる男を振るのはいつものことだ」

俺がズズッと紙パックの中身を飲み干し言々と巽も頷く。

「それはもはやこの学校の七不思議のひとつ——」

「にはなつてねえから！」

俺が素早く突っ込みを入れると巽は、済ました顔で読みかけていた少年漫画に視線を落とした。

泰治と疎遠になったかわりに中学から仲良くなった巽は、ちょっと変わり者だが俺の親友だ。

面倒臭がりで何を考えているかわからないところもあるのに、なぜかこいつという時が一番楽だった。

巽と同じクラスで俺は休み時間こいつの他、数人の友達と過ごす。泰治とはこれまでの空白の数年のせいかな、つるむことはなくなってしまう。

が、こんなふうになるときおり話しかけてきたときのなつっこさは昔の彼を思い出す。

「で、木戸君。航平に仇とってどういことですか？」

漫画から顔もあげずに巽が促すと泰治は一瞬ムツとしたような顔を

した。

（巽、人と話すときはせめて顔あげる）

しかも敬語を使ったことで、どうやら泰治には馬鹿にされたように聞こえたらしい。

巽を無視して俺に懇願するよう言った。

「航平っ。安在をおまえに惚れさせてそのあとこっぴどく振ってくれ」

「はあ!？」

「俺が味わった屈辱を彼女にも味わわせてやるんだ。大丈夫、おまえ面はいいから女が好きそうな甘い言葉吐いて誑かせば絶対落ちるって!」

「や、俺、無理だつて。ていうかおまえ、仮にも好きだった子に対して——」

これって世間的にはこう言うんじゃないか？

「最低だね、木戸君。そういうの逆恨みって言うんですよ」

そう、それだ。

逆恨み。

巽が棒読みで言うつとピクと泰治は眉を釣り上げた。

「成山、さつきからおまえうるせえよ。俺と航平の話に口挟んでくんな。この漫画オタクが」

そして俺に向かって猫なで声を出してくる。

「頼むよ、航平。俺とおまえの仲じゃん」

「いやだ」

「冷たい」

「この件に関しては冷血漢でいい」

「ふーん、そんなこと言っているの？おまえの過去学校でバラすぞ？」

泰治の言葉に俺はギクと顔を強張らせてしまった。

逆に泰治はニヤリと俺に向かって笑う。

ちくしょう、こいつはアレを知ってるんだった。

「……わかった。とりあえず放課後、安在に告る」

「え？おまえに惚れさせてからじゃねえとさあ」

「心配しなくても俺と彼女は既に顔見知りだ」

隣のクラスだから彼女も俺の顔ぐらいは知ってるはずだろう。

そういう意味での顔見知りだが真実は黙っておく。

「ふうん。やっぱおまえってそういう奴だよな」

「そういつ？」

「顔が広いつつてんだよ。昔っからそうじゃん？んじゃ頼りにしてるぜー、西嶋航平君」

にこやかに泰治が屋上からいなくなったところで、巽がパタンと漫画を閉じて俺に目を向けた。

じいっと見つめてくる目に責められているようだ。

「航平、木戸にどんな弱み握られてんの？」

「え？」

逆恨みした男の復讐を手伝うなんて、てっきり軽蔑されたかと思っていた。

「俺、航平と友達になったの中学からだからそれ以前のことだよね？小学校の頃の話？」

「言いたくない」

「実は小学校の影の支配者だったとか？」

「言わないって言ってんだろ」

「そこまで言いたくないの？じゃ聞かない。そろそろ昼休み終わるし教室戻る？」

漫画片手に立ち上がる巽を追って横に並びながら俺はつい尋ねてしまった。

「とめないのか？」

「うん。だって俺、木戸って嫌いだし関わりたくない。自分でなんとかしてね」

「嫌いって……はつきり言うなあ」

「航平の友達みたいだから黙ってたけどちょっと限界。さっきのあれ、全世界の漫画好き敵にまわしたよね、彼」

「もしかして漫画オタク発言にキレた？普通、逆恨みの方を気にしないか？」

「そこはもう男としてどうかというレベルでなく人間として終わってるよね」

階段を降りつつ巽が抑揚のない声で言う。

こいつは普段から淡々とした口調で話すからいまいち感情が読みにくい。

けど人として終わってる発言はかなり辛辣だから、相当泰治のことが嫌いなのだろう。

実際俺もあいつのやろうとしていることは理解できない。

「昔はあんなじゃなかったんだけどなあ」

「時間の流れってときに無情だよ」

トンと廊下に降り立った巽は俺を振り返った。

「航平が本気で困ったら言うてね」

「心配してくれんの？」

「うん、ちよつと——」

「ちよつとかよ」

脱力した俺が教室に向かって歩き出すとちょうどチャイムが鳴り始めた。

「嫌な感じだったから」

「ん？なんだって？」

チャイムのせいで巽の言葉が聞こえなくて尋ね返したが返事はなか

った。

* * *

そして放課後、俺は隣のクラスの安在雛姫を第2校舎裏に呼び出した。

昇降口にある下駄箱にメモを入れて呼び出す古臭い手だがうまくいったようだ。

泰治は物陰に隠れて俺たちの様子を見ているはず。

俺は安在に告白してすっぱり振られるつもりでいた。

そもそも今日まで話をしたこともない彼女に告ったところでうまくいくはずがないし、ここで俺が泰治と同じ目に合えばあいつも同類ができて逆恨みなんてやめるだろう。

熱気を孕んだ風はこれからくる夏を思い起こさせる。

大音量の蝉の鳴き声、うだるような暑さ。

考えるだけでうんざりしたくなるが、この風に揺れる彼女の髪は軽やかでどこか涼しげに見えるから不思議だ。

柔らかそうな髪だなあと思いつつ俺は安在の顔を見て正直引いた。
なんか俺、すんげえ睨まれてるよな。

これが泰治の言ってた見下しってやつか。

じゃあこのあと俺は「無理」って振られるわけだ。
よし、こいつ。

「あの、西嶋君？」

突然呼びかけられた俺は彼女が近づいてきたためどきまぎした。

「本当に？」

俺を見上げてくる目が……さっきより怖いのはなんだ。

目を細めて睨まれると美人なだけに迫力がある。

「本当につて、えーつと確かに俺らあんまり話したこともないけど

――」

というより話をしたのは今日がはじめてだけだな。

そんな俺から「好きです」つて言われても信じられないのは当たり前だろう。

「3年2組西嶋航平君」

クラスとフルネームを言われて俺は「はい」と思わず返事をしていった。

瞬間、彼女は飛びのくように後ろに後退る。

近づいたり離れたりつてなんだ、このおかしい行動は。

しかもなんかぶつぶつ言ってる。

もしかして行動が挙動不審な上、電波と交信でもするイタイ人だったかと俺は身構えた。

だがよくよく聞けば「どうしよう」とか「やっぱり無理かも」と言っている。

無理でいいんだ。

ここは素早く瞬殺してくれ。

「安在さん？」

「あ、はいっ。なんでしょう？」

顔をあげた安在がまたしても俺を睨む。

目つきは怖いのに敬語つて変だな。

「や、なんでしょうじゃなくて……俺、返事聞いていいかな？」

「そ、そうですね。すみません」

「すみません」の言葉に俺は安堵の息を吐いた。

「無理」ではなかったがきつぱり断ってくれたようだ。

「ああ、うん。やっぱりそうだな——」

「よろしく願います」

「突然呼び出して……ん？安在さん、いまなんて？」

「よろしく願います？」

一瞬、俺の思考が停止した。

そしてすぐに活動を再開する。

二度「よろしく願います」が聞こえた気がするが。

俺は額に手を当てて首を振った。

「聞き間違いだな。もう一回聞いていい？」

俺の質問に彼女は頷く。

制服のスカートを揺らしながらペコンとお辞儀がついていた。

「今日からよろしく願います、西嶋君」

俺、彼女ができたんだろうか。

しかもこんな美人の女の子。

……いいや！ちよおと待てー！！

こんな展開、俺は望んでいない。

誰か嘘だと言ってくれっ。

これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ。
夢夢夢。

昇降口で念仏のように繰り返していた俺は、
「お待たせしました、西嶋君」
という可愛らしい声に頭を抱え込みたくなった。

告白から数分後。

俺は安在と一緒に帰宅することになってしまった。
「せっかく彼女になったんですから恋人同士っぽいことがしたいです」

意外な言葉にポカンとする俺をよそに、彼女は昇降口で待っていて
くださいと教室にカバンを取りに行ってしまった。

俺は振られてすぐに帰宅するつもりだったから、荷物はばっちり持
参していた。

状況が飲み込めないまま、安在に言われた昇降口に向かう俺の前に
巽が姿を現す。

「祝、初彼女」

言いながら右手を胸の前にあげるのはタッチでもしろってか。
嬉しくもないのになんでそんなことしなきゃいけないんだ。

「おまえまで見てたのか。ってか泰治は？」

右手をわきわき握っていた巽は、無理やり俺の手にタッチしてから
校舎のほうを指差した。

「悔しそうな顔で走ってったよ。まさかうまくいくとは思ってなかったんじゃない？男の嫉妬って醜いよね」

「俺だってOKされるなんて思ってたよ。いまさら冗談ですつつたら怒るかなー、やっぱり」

「いつもみたいに冷たく捨てるっていうのやればいいんじゃない？」

「人が聞いたら誤解を生むようなこと言うなっ！んなことしたことはないわっ。今日まで告白したこともされたこともないっつうの」

「航平って損してるよね、いろいろと」
溜め息混じりに巽に言われて眉を寄せる。

本当、こいつはたまによくわからないことを言う。

「泰治の前で俺も振られれば同類相憐れむっつうか——それで逆恨みしなくなってくれればって思ってたんだよ。なのに……安在って何考えてんだ？あれだけ俺のこと睨んどいてつきあうってわけわかんねー」

「女心と秋の空っていうでしょ。じゃ俺はこれで。今日から航平は安在さんと帰るんだろっし、俺は一人寂しく帰る」

「え？ちよつと待て、巽」

ヒラリと手を振った巽を呼び止めても立ち止まってくれなかった。

かくして俺は昇降口で安在を待って……そして現在に至る。

隣のクラスの彼女の下駄箱は俺のクラスの下駄箱の向かいだ。

上履きから靴に履き替える彼女を落ち着かない気持ちになりながら見ていた俺は、靴を履きかけた彼女がいきなり息を飲んで慄いたのでぎょつとした。

「どうかした？」

「に、にし、西嶋君……むむ、む」

はい？

わけがわからず近づく俺は安在が指差す床を見た。

スノコと彼女のローファーがあるだけだ。

「靴がなに？」

「む、虫、靴で潰しちゃった」

「え？虫？」

「その緑色の長い芋虫……。虫苦手な靴を触れない」

え、芋虫を靴で潰した？

靴に潰れなかった部分が蠢いてたらそれは俺もちょっと引く。

屈みこんで靴を覗き込んだ俺はつい笑ってしまった。

「もしかして目悪い？これ、虫じゃなくて毛糸」

俺が薄汚れた黄緑色の毛糸を摘み上げると、彼女は目を細めてそれを見つめ、やがてホツとしたように息を吐いた。

近くにあったゴミ箱に毛糸を捨てる俺は、安在が睨んできていた理由がわかって彼女を振り返った。

「眼鏡、持っていないの？」

「あります」

「じゃ、かければ？さっきまで俺、睨まれてるのかと思ってたし」

「え？睨……。ご、ごめんなさい。コンタクト、片方なくしてしまつて週末に新しい物を作りに行くつもりですから」

「うん。でも眼鏡かけないと危ないか？目、かなり悪いんじゃないの？」

頷く安在はごそごとカバンを探りケースから眼鏡を取り出すと、俺から顔を隠すようにそれをかける。

「なんで顔隠すわけ？」

「似合わないから」

「はあ？もしかしてそれが眼鏡かけてない理由？」

「すみません」

そう言つて俺を見た彼女の顔に淡いボルドー色の眼鏡がかかる。

「いつもと違つて優等生っぽくなるけど別に变じゃないじゃん。や

っぱ怪我したら危ないしコンタクト買っただけでかけてるほうがいいって。日常生活に支障きたしてるだろ、安在の場合」

「……呼び捨て」

「へ？——あつ、ごめん、つい。安在さんでした」

「呼び捨てがいいです。でも、できれば名字じゃなくて名前……雛姫って——」

言いながら安在の顔が赤くなる。

なんでそこで赤くなる？

ってか、うわなんだこれ。

こっちまで照れるって。

「名前……？いや、いきなりハードル上げすぎ。そこは安在で。それから安在も俺への敬語やめて。同い年だし」

「うん、わかった」

はにかみながら頷かれ、俺は彼女を直視できなくなった。

「かわ——」

掌で口をおさえ無意識に言いかけた言葉を塞ぐ。

しかし彼女に聞こえてしまったようだ。

「カワ？」

見上げてくる目に問われて心臓が口から出るかと思った。

よかった、手でおさえていて。

本当に彼女は俺と同じホモサピエンスか？

いや違うだろう。

こんな可愛いのに絶対俺と同じじゃない。

とにかく落ち着け俺。

「や、なんでもない。それより俺、電車通なんだけど安在は？」

「わたしも」

「そ。んじゃ帰ろう」

並んで歩きながら俺は全力で後悔し始めていた。

安在は泰治が言うような男心を踏みにじるような嫌な女じゃないと思う。

裸眼じゃよく見えなくて目を凝らした彼女の眼差しを、あいつは見下されたと勘違いしたんだ。

きつと告白を断られたショックで彼女を悪者にしてるんだろう。

そんな泰治の逆恨みをやめさせるためとはいえ、軽い気持ちで安在に告白した俺って最低じゃないか？

しかも安在をよく知らなかったときは観賞用と興味すらなかったくせに、実際の彼女を知ったとたん可愛いとか思ってるなんて、俺はどれだけ現金な奴なんだ。

ここは正直に真実を話すほうがいいんだろうか。

ちらと安在を見下ろせば、肩下で揺れる軽やかな髪や長い睫、少し赤みがさす頬なんてのが、いちいち俺を魅了する。

観賞用フィルターがなくなったいま、俺の目は彼女のまぶしさに耐えられないみたいだ。

これじゃ安在を見て話ができない。

しばらくすれば彼女を見慣れるだろうし、その時にすべてを話そう。大事な話をするときは相手の目を見てするのが礼儀だ、うん。

「西嶋君、なに、かな……？」

俺の視線に安在は気づいたらしい。

まあ二人して話もせず黙々と歩いていれば、ガン見に気づかれて当たり前か。

「えー……」

言葉を探したけど結局何も見つからず首を振る。

「なんでもない」

「……もしかして、つまらない？」

「へ？」

「わたし、話もしなかったもんね。き、緊張して何を話したらいいか——あつ、でも緊張って言うても困ってるとかじゃなくてね。男の子とこうやって並んで歩くとか初めてだから……って、あああ何言ってるんだろう、わたし」

お約束どおりそこで恥ずかしそうに頬を赤くするのか。

いやもう、どんだけピュアなんだって話だな。

安在を陰で遊んでそうって言うてニヤけてた野郎がいたが、あいつらに鉄拳食らわしたい。

「話って別になんでもいいと思うけど。昨日、何した。どんなテレビ見た。こういうのに興味ある。……そんな感じで。はい、どうぞ」

「え？わたしから話題を振るの？じゃあ一言ですまさないで話題を膨らませてね」

「努力します」

「なんで敬語なの……わたしが使うのヤダって言うたくせに」

あ、ちよつと拗ねた。

こんな顔もするのか。

「話してんじゃん、俺たち。無理しないでこんなんでもいいんじゃないの？ずーつと話してなきゃいけないってわけでもないし、沈黙になつたときは別にそれでもいいと思うけど」

「もしかして西嶋君、ここまで沈黙だったのも全然気にならなかったの？」

「え？安在気になんの？そりや嫌いな奴とだったら沈黙は気まずいけど。俺、一緒にいる奴と空間を共有してる空気とか好きなんだよな」

沈黙なんて巽といればほとんどそんな感じだ。

あいつが漫画ばっか読んでるって気もしないでもないが、そうじゃないときでもポツポツ会話してるだけで、ほぼ黙ってるってことがある。

俺と同じで巽も沈黙を楽しめる奴だ。

だから俺とあいつは馬が合うのかもしれない。

「そっか」

安在がふふと小さく笑う。

笑顔が嬉しそうに見えるのは俺の気のせいかな？

なんで喜ぶんだ。

女ってやつばわからん。

けどそんな彼女を見た俺の胸が小さく跳ねたのは、気のせいなんかじゃないはずだ。

駅まで通学路は生徒が帰り道に買い食いできる駄菓子屋がある。俺と安在がその前を通ったとき見慣れたリュックが見えた。俺はそれを横目で見つつも通り過ぎる。けれどすぐに安在が気がついた。

「あの、西嶋君？」

「なに？」

「後ろの人……」

「あ、俺のことは気にしないで」

「本人もそう言ってるし——って気になるわぁ！ 巽、おまえ一人で帰るって言ってなかったっけ？」

「一人で帰つてるところにたまたま航平と安在さんが来たんだよ。で、これまたたまたま俺の前を歩いてるだけ。わぁびっくり」

例のごとく棒読みで言われても説得力がない。

「西嶋君のお友達だよな」

「成山巽、18歳。スリーサイズは内緒。よろしく、安在さん。眼鏡かけると女教師みたいでいいよね。いろいろ想像がかきたえられる感じ」

おいこら、そこでグと親指を突き出すな。

「はい、よろしくです。成山君」

で、安在は意味わかってない……と。

天然か、天然なのか？

ベタなギャルゲー設定並みのキャラだったのか。

けどその設定、俺も嫌いじゃな……ゴホン。

巽が俺に向かって笑う。

なんだ、その「すべてわかってます」的な生ぬるい目は。

「え？なに安在さん。俺も一緒に帰ってほしいって？わかった。安在さんがそこまで頼むなら一緒にしましょう」

いきなり独り言を言っ、すまして俺の隣に並ぶ巽を覗き込むように見上げる安在は、クスと笑って眼鏡の奥の眼差しを俺に向けてきた。

「面白いね、成山君って」

「えと、こいつも一緒にいいのか？」

「うん」

「あ、航平。俺、本屋寄っていい？女の子雑誌も置いてあるし安在さんも行きたいよね」

駅前の本屋を目にした巽の足は既にそっちに向かっている。

「おまえは漫画を買いたいだけだろうが」

「学校帰りの寄り道は高校までの特権でしょ。満喫しようよ」

「成山君いつも漫画読んでるけど好きなの？」

「漫画は日本の文化でしょう」

本屋に入ると巽は漫画コーナーに一目散に消えた。

俺は安在を見下ろし雑誌の並ぶ棚を指差す。

「あっち安在が読むようなものがあるんじゃないか？」

とはいえ、俺は女の読むファッション誌なんてまるで興味もない。

所在なげに安在の後ろに控えていると、それに気づいたのか棚を移動した彼女は、ふと料理雑誌の前で足を止めた。

「西嶋君、明日お弁当作ってきてもいい？」

「え？」

「それ一緒に食べたいなって思って……だめ、だった？」

「や、俺いっつも学食かパンだから嬉しいけど」

「ホントっ？」

ばあ、と顔を輝かせる彼女に俺の胸がまたしてもドクンと跳ねる。
なんだこの嬉しくてたまらんって顔は。

さっきまでの笑顔も可愛いけど段違いじゃないか。

俺の心臓がドクドクと脈打ち始める。

ヤバイ、これはヤバイぞ。

「あのね。それから今度の日曜日、もし暇だったら一緒に図書館で勉強とか……ほんとに暇だったらでいいの」

「じゃケー番とメアド交換しとく？」

これ以上深入りはやめるともう一人の俺が叫ぶのに、なんで連絡先聞いてんだ！？

どうして携帯を取り出してしまっただ！？

冷静になって考える、俺。

話したこともなかった子と俺がつきあうことになって、しかも彼女はなんかやたらと積極的で、そのうえ俺の言葉にいちいち嬉しそうな顔になるって……ありえないっ！

夢よりありえないだろっ！！

でも。

「いいの！？」

って、一段と綻ぶ安在の笑顔は現実に俺の目の前にあって――。

「二人して連絡先交換してるの？俺も混ぜてよ。ハイ、安在さん赤外線」

書店の袋を手にほくほくと俺たちのところへ来た巽が素早く携帯を取り出した。

「ちょ、俺のがまだだっつの！」

「え、航平。俺のケー番ゲットしたかったの？早く言ってよ」

「おまえのなんてとづくに知ってるわ！」

「二人ともほんとに仲がいいね」

くすくす楽しそうに安在が笑い出す。

彼女に落ちない男がいたら見てみたい。
なんて可愛い顔で笑うんだろう。
もう嘘でも夢でも何でもいい。
告白してからたった1時間ばかりで、俺は彼女に完全にノックアウトされた。

* * *

次の日学校に行くと、俺と安在がつきあいだしたことは既に広まっていた。

一緒に帰るところを見ていた奴がいたし当然だ。
友達に冷やかされたけど肝心の泰治は俺に何も言ってこなかった。
それは俺が約束どおり安在を振ると信じてるからだろうか。

昼休みになって屋上で安在が弁当を広げた。

赤・黄・緑とカラフルな彩りで見るからにつまそうだ。

「おいしそうだね」

おい、巽。

その台詞はおまえじゃなくて俺が言うんじゃないか？

「本当？成山君も食べてね。たくさんあるから」

んで、さりげなくおまえのおばさんが作った弁当を俺によこすな。

「体育のあとの空腹ってハンパないんだよね。じゃ、遠慮なく」

「俺より先におまえが食うなよ。っていうかこれは返す。おばさん泣くぞ？」

「だから航平食べてよ。たまには学食やパンじゃなくて手作りのお弁当が食べたいでしょ？」

「俺は安在のを食べる」

「もー、わがままだな。じゃこれは安在さんにあげるね」

「え？わたしが食べるの？」

そこからは異と奪い合うようにして弁当を食べた。

だってうまい。

彼女が作ったからだという欲目を抜きにしても本当においしかった。それを素直に伝えると安在はまた俺が好きになった可愛い笑顔を浮かべた。

聞けば彼女は料理や菓子作りが好きで、大学も家政学科のある大学を目指しているらしい。

「ふーん、じゃ安西さん、航平と志望校離れちゃうね。家政学科のある大学って女子大でしょ？航平、理系に強い大学狙ってるよ。因みに俺は将来ネコ型ロボット作って、ネズミにも負けないストロングキヤットにするつもり」

「西嶋君は理系クラスだしわたしは文系だもん。進学先が違うつてわかってるしそれに――」

言いかけて安在は口を閉ざす。

「それに？」

俺が促すと彼女は微かに笑って首を振った。

「うつん。いまから先のこと考えたって仕方ないよね」

もしかして受験に失敗するとかか？

それは笑えないしシャレにならないだろ。

それとも目指す大学のレベルが高くて不安だったりすんのかな？
あ、だから昨日、日曜に図書館で勉強しようって言ってきたのか。
てことは色気のカケラもない誘いだってたわけだ。

デートっていうより勉強会だったんだなと俺が勘違いを正したところで、弁当を片付けた安在は次の科目の当番らしく先に教室へ帰っていった。

翻る彼女のスカートの裾を見つめてしまったのは、中が見えかけたからではけしてない。

「いま、もうちょっとだったのになーとか思った？このスケベ」

巽が首に手をかけのしかかってくる。

やめろ、暑い。

「んなわけあるか。つつかおまえどこ見てんだよ。」

「俺も健全な青少年だから。それにしても安在さん。性格悪い子には見えないよね。お邪魔虫の俺がいても嫌な顔一つしないし。――

そつか、航平はそこまで愛されていないのか。もしかして航平より俺に惚れた？俺がいい男すぎるばかりに……航平、振られるんだね」
俺はグイと巽を押しつけた。

「つきあいだしたばつかなのに縁起でもないこと言うな！」

「木戸にどう言い訳する気なの？」

前置きなく巽に突っ込まれて俺は、う、と言葉を詰まらせた。

「正直に安在さんが好きになったって言って、2、3発ボコられておしまいにすればいいでしょ？」

なんで俺が安在のことを好きになったってこいつにばれてんだ！？

「いや、もうばれましょう。6年目のつきあいだからね」

巽がしれつと答える。

俺の心を勝手に読んで会話しないでくれ。

ちよっとビビったぞ。

つつか、俺、そんなにわかりやすく顔に出てんのか？
てことは安在の前でも好き好きオーラ出まくり！？
それはさすがに恥ずかしすぎるだろう。

軽く咳払いして俺は表情を引き締めた。

「やっぱ落ち着けどころはそこしかないか」
泰治のことを思い出すと気が重い。

「この学校の七不思議がまた一つ増えたよね。安在さんが航平の彼女になったことにみんな驚いてたし」

「俺、騙されてんのか？」

「いままで誰に告白されてもOKしなかったのは、自分のことが好きだったからって思えばいいんじゃない？」

「そんな自惚れ野郎になりたくない」
ぼん、と巽が俺の肩を叩いて頷いた。

「いまのままでいようね、航平。この先なにかあったら骨ぐらいは拾ってもいいよ」

「俺が安在に振られんの前提かよっ」

突っ込みを入れた俺は金網にもたれて空を仰いだ。

「泰治の安い脅しに乗って告って——断られるって思ってたってのは言い訳だろーな」

でも安在がOKするなんて本当にこれっぽっちも思ってたんだ。

「あっちーなあ。衣替え、来週からだっけ」
「そう」

話題を変える俺に合わせて巽が頷く。

安在のことや泰治との約束のことに、これ以上触れないでくれるの
がありがたかった。

きつと俺が本当のことを安在に話せば間違いなく振られるだろう。

けど彼女を好きになつてすぐに嫌われるつてのはさすがに辛い。

だからもう少しの間だけ夢見てもいいかな。

溜め息が出そうになるのを堪え、俺は眩しい太陽から目をそらした。

日曜日、待ち合わせたのは図書館の入口だった。

俺と安在は中学こそ違うけど隣の学区だったらしい。

二人の家は自転車で20分ほど離れていただけだった。

待ち合わせは午後からにしようかと俺が言つと、彼女は午前中からがいいと言ってきた。

お弁当を持っていくから近くの緑地公園で食べようとか言われたら……俺が領かないわけないだろう？

待ち合わせた時間より早く着いた俺はそわそわと安在を待つ。

ピロリロリンと携帯が鳴ったため確認すれば、『自転車置き場に着きました』という彼女からのメールだった。

えーと、これはもうすぐ図書館に着くという連絡か？

俺は自転車置き場に向かう。

弁当を持っているなら大荷物だろうと思ったからだ。

図書館を回りこんだところで俺は安在とちょうど出会った。

「っはよ」

つて、なんじゃこりゃあ！

私服姿の安在を初めて見た俺はとっさに朝の挨拶をしつつも内心叫んでいた。

「おはよう、西嶋君。びっくりした。もう着いてたんだね」

彼女は俺を見て驚いた顔を笑顔に変えた。

フリルチュニックにハーフパンツなんて、よく見るファッションなのに彼女が着るとどうしてこうも違って見えるんだ。

なんか薄い素材で程よい腕の透け感とか、パンツから覗く素足とか。

グッジョブ！

……でもこれ、見ていいのか？

ついでに言えば、学校ではおろしている髪のサイドをゆるく編みこんで、後ろはふわふわのまま流すようにヘアアレンジしてある。もうこれ持って帰りたい。

か、可愛すぎる。

「どうかした？」

はっ、うつかりまた見惚れていた。

「や、眼鏡してないしコンタクト買ったんだなって」

「うん、昨日」

「安在が気にするほど眼鏡変じゃなかったけどな」

「ホント？眼鏡嫌いじゃないの？」

「嫌いも何も俺、目はいいからかけないし」

「そういう意味じゃなくてね？」

「うん？あ、伊達眼鏡とか？服とコーディネートしてかけてる奴いるけど、俺、そういうのはしないな」

なによりそこまでおしゃれじゃない。

今日だってジーンズに黒T、アウターがわりのシャツって、男にありがちな面白味もない服だと思う。

一応、シャツは一番のお気に入りを選んだけど。

ん？なんか安在の顔が困惑してないか？

ひょっとして俺の今日の服装どっか変とか？

やばい、どこがおかしいのかさっぱりわからん。

色か？組み合わせか？

……俺、安在の横に並んでいいんだろうか？

一抹の不安を覚えつつ、そんなことはおくびにも出さない俺を、巽あたりが見たらいいカッコしいだと笑いそつだ。

笑いたいなら笑え。

俺も男だし彼女の前じゃちょっとはカッコつけたい。

「荷物、かして。持つ」

「え、あ……いいよ」

「弁当とかあつて重そうだから」

ん、と手を出しながら安在が気を遣わなくてすむような、もっと気の利いた言葉を言えたらいいのと思う。

迷うような素振りの後、彼女に差し出された大きなカバンはずっしりと重かった。

「うわ、重っ」

「ご、ごめんね。参考書とか入ってるから。あ、勉強道具は別のカバンに分けて一緒に入れてるだけだから、それをわたしが持てば――」

「じゃなくてよくこんな重いもん持ってここまで来たよなって思っ
て。けっこう力持ちなのな？」

肩にひっかけ来た道を戻る俺の後を、彼女が小走りに追っかけてくる。

「西嶋君、カバン出してっば」

「図書館まですぐじゃん。それより弁当のメニュー何？」

「唐揚げと出汁巻き卵と牛肉のアスパラ巻き――」

「アスパラの牛肉巻きだろ」

「あれ？そう言わなかった？」

「逆言った。アスパラは昨日食ってうまかったやつだ。唐揚げと出汁巻きは別の日に入ってたよな。俺、好きなんだ」

「あ、よかった。やっぱり好きなんだ」

「え？」

「だってそれ、お弁当に入れてったら先に食べちゃったし好きなのかもって。やった……当たってた」

ふふ、と笑う安在を見ながら俺は驚いていた。

そんな些細なこと見てんのか。

なあ、こんなこと言われたら勘違いすんだけど。
もしかして俺のことが好きなんじゃないかって。

「っあ……」

図書館の中に入ると連日の暑さからか冷房がきかせてあった。

「涼しい」

彼女の声に俺は我に返って開きかけた口を閉じていた。

おいおいおい、俺いま何を確認するつもりだった？

まさか俺のことを好きかどうか尋ねるつもりだったのか？

冷静になれ、俺。

まずそれはない。

数日前、初めて話した男のことが好きなわけあるか。

じゃあ、なんで俺とつきあうことをオッケーしたんだって思うけど、
それを尋ねる勇氣は俺にはない。

彼氏っていう響きに憧れがあったとか、とりあえずつきあってみた
とか、きつとそんなところだろう。

告白してすぐ振られなかったのは、これまでの奴と違ってちょっと
は俺に興味を持ってくれてるってことかもしれない。

でも合わないやすぐに別れるとか思ってたらしないだろうか。

……なんて自分の考えにへこんだ俺ってどんだけヘタレなんだか。

図書館には学習室というのが設けられていて、そこなら少しくらい
声を出しても書架とは離れているので問題はない。

あまり広い部屋ではないから席は早い者順に埋まってしまっけど、

午前中から出向いてきたこともあってまだ空席の方が多かった。

4人掛けの机に俺が向かい合わせに座ろうとしたところで安在が俺の服を握る。

「隣」

「え？隣？」

もじもじとなんか恥らってるけど。

で、次の瞬間。

「数学教えてもらっていい？ぜんっぜんわからないの。中間、赤点だったのに期末も赤点とっちゃう。このままじゃ留年かも……」

あ、なるほど。

赤点暴露が恥ずかしかったのか。

「留年？そこまでひどいの？」

「ひどいんです。だってどこがわからないのかもわからないのー」

ははは、たまにいろよな、そういう奴。

これってもしかして中学からやり直しパターン？

遠い目をした俺を見て安在が萎れたように言う。

「馬鹿でごめんなさい」。西嶋君の受験勉強の邪魔しなくなかったけど、期末の赤点を避けれるくらいに叩き込んでください」

というわけで俺の右隣に安在が座って勉強開始。

このほうが右利きの彼女の書いたノートが見やすい。

んで、目の前に参考書と教科書がドンと重ねられた。

「気のせいかな、高1と高2の時の教科書まであるけど？」

「どこからわからなくなったのか突き止めようと思って。躓いたところからやり直せばなんとかなるでしょ？それでも中学までは数学わかってたの」

そうか。

原因究明するのか。

文系なら入試で数学は不要だったりすることもあるのに、根が真面

目なんだなあ。

まあでも、中学からやり直しは避けられそうだ。

「西嶋君、お茶。はい、どうぞ」

「ありがと」

図書館の隣にある緑地公園のベンチで弁当を広げ、俺は手渡された茶で喉を潤した。

二人の間に並べた弁当は今日もうまそうだ。

唐揚げをとつてもりもり食べていると、彼女はペコンと頭を下げてきた。

「ヤマまで張ってくれたし期末、なんとかかなりそうです」

「そりゃ良かった」

「関数とか証明とか自分の苦手なところもわかったのも嬉しい。ほんとにありがとう」

「受験に数学いんの？」

「選択で省けるけど。でもまったくわからないまま卒業したくなかったの。西嶋君の教え方わかりやすかった。おバカなわたしでもわかったもん」

「安在、馬鹿じゃないって。たぶん苦手意識が先立つてるだけじゃん？問題こなせば大丈夫だと思うけど」

「ホント？よし、じゃあ頑張る。でも午後からは受験勉強もしなきゃね」

箸を持ちながら両手を拳に握る安在は、このままずっと勉強をするつもりだけのようだ。

ちよっと公園を息抜きに見てまわるとか、そういう彼氏彼女のデートっぽいことはやっぱないわけか。

「そついや安在つてどこ志望？」

「わたし？んーとね——」

お互い第一志望の大学を言い合えばけっこう近いことが判明し、後は他愛もない話で昼食は終わった。

図書館に戻ったところで安在は建物の外にあった自販機で、俺がいつも飲んでいた紙パックの苺ミルクを買って、数学を教えてもらったお礼と奢ってくれた。

「なんで苺ミルク……」

「え？だってよく飲んでるから」

もしかして見られてたのか！？

俺とのつきあい長い異は慣れてるけど、他の友達にはコレ買うと笑われるんだ。

女がよって。

まさか、安在もそんなこと思ってたらしないか？

「西嶋君って甘いの、好きなの？」

「けっこう。うちの母親と姉ちゃんが甘い物好きで、普通んちよりケーキ食べる頻度は高めじゃないかな。俺はどっちかってえと甘さ控えめなケーキが好き」

「お姉さん、いるんだ？わたし、弟」

「ああ、俺も弟いる。俺、3兄弟の真ん中だから——ありがと、もらっ」

ちゅー、と苺ミルクを飲んだ俺は、物言いたげな視線に気づいて彼女に目を向けた。

「お菓子、作ったら食べてくれる？」

「食べる」

即答した俺に安在は嬉しそうに笑う。

「甘さ控えめ、ね？」

「ん。けど、弁当とかお菓子とか材料費バカになんないだろ？今日も弁当食べといていうのもなんだけど無理ない程度で——」

「もしかして迷惑だった？」

とたんにしゅんとする彼女に俺は大きく首を振った。

「それはないつ。弁当はうまいしお菓子だって食べてみたい。そこは誤解なしで！！ただ、毎日はやっぱり悪いってか……材料費だけでなく、弁当作るのに早起きしなきゃいけないだろ？」

見上げてくる目はまだ納得しきつてないように見える。

どうにかわかってもらおうと俺は言葉を続けた。

「受験生なんだしその時間を勉強か睡眠に充てたほうがいいと思う。だから時々で充分」

「せっかく彼女なのに」

少し口を尖らせてるのは拗ねてる？

それがまた可愛いってアリか？

「せっかく彼女なのに」ってのは、「彼女っぽいことがしたい」と同意だろうか。

それなら俺だって彼氏っぽいこと……ていうかつきあってるっぽいことしたいぞ！

そういうこと俺が望んでも引かれないかな？

「あの、さ。もっかい公園戻って散歩——」

「え？」

あ、やっぱり引かれた。

あくまで彼女っぽいことがしたいだけで、俺とどうしたいってわけじゃないのか。

すみません、調子乗りました。

「——とかはしたくないよな。勉強しに来てんだし」
「行く」

「へ？」

「行きたいっ」

耳と疑った俺だけど、見下ろす安在の顔が嬉しそうに破顔したから、聞き間違いじゃないんだろう。

うつしゃ、と気持ち的にはガッツポーズをしながら俺も笑う。

苺ミルクを一気に飲み干した俺は紙パックをゴミ箱に捨てると彼女を振り返った。

空の弁当箱や水筒が入ったカバンと自分のバッグを纏めて持ち、空いた手を差し出してみる。

こんな大胆なことができたのは、きっと彼女とデートができることに有頂天になっていたからだ。

「繋いでく？」

でも嫌そうな素振りを見せたらすぐに手を引つ込めよう。

……やっぱり根はヘタレだ、俺。

「うん」

照れくさそうな顔をしながらも伸ばされた手を握って、俺はその柔らかなさに本気で驚いた。

強く握ったら折れるんじゃないか、これ。

しかも彼女の緊張が俺にも伝わってきて……うつわ、今更ながらにこっぴどかしいっ。

「な、なんか照れるね」

「言っな」

「あ、ごめ……」

「余計に緊張する」

「嘘、西嶋君も緊張してるの？沈黙へいきなのに」

「それとこれとは別」

歩き出した俺に彼女は一瞬遅れてついてくる。

ちらと彼女を見れば俺を見ていたのか目が合った。

互いに勢いよくそらしてもう一度窺うとまた目が合う。
そのせいで二人して噴出していい感じに力が抜けた。

「西嶋君の手おっきいね。公園まわってる間、繋いでていい？」
そんなのいいに決まってるっ！

どれだけ彼女は俺を喜ばせる気なんだろう。

返事の代わりに繋いだ手に少し力を込めると、俺の隣で安在はありえないほど可愛く笑った。

「なーなー、航平。どうなってんの？いつになったら実行してくれるわけ？」

ちっ。

とうとうきたか、泰治。

俺が安在とつきあいだしてから二週間が過ぎている。

そろそろ何か言ってくるとは思っていたんだ。

朝っぱらから屋上まで連れてこられたけど、俺はいつも始業ギリギリに登校するからもうチャイムが鳴るんじゃないか？

そう思ったところで校内にチャイムが鳴り響く。

このまま教室に戻る……ことはできそうにないか。

俺は腹をくくって泰治を見つめた。

「それ、無理。俺にはできない」

「はあ、なんでだよ？」

「俺が安在を好きだから」

おおう、目が落ちそうなほど見開いてるなあ。

殴りかかってくるかと思ってたけど、それよりびっくりしたって感じだ。

「安在見ててわかったけどおまえが言うような嫌な女じゃない。泰治は見下されたって言ってたけど、あれ、目を細めて物をよく見ようとしてただけだぞ？ちょうどコンタクトなくして裸眼じゃなんも見えてなかったからだ」

「航平、俺を裏切んのかよ？」

俺が仲間だったみたいない言い方するな。

脅して引き込んだくせに。

「最初っからいやだつて言っただろ？」

「おまえ、わかったつつつたじゃん」

「告って俺もおまえと同じように振られれば、そこでおまえが考えを改めると思っただよ。俺だつてまさか安在がOKするなんて思っただけだ」

「今更言い訳かよ。で？自分の彼女になったとたん惜しくなつたつて？そりゃあれだけの女なら連れて歩くだけで自慢だよな」

「自慢？んなつもりねえよ」

安在を商品か何かのように言われてカツとなった。

そんな俺にどうだかというような目を向け、泰治は顔つきを一変させる。

「おまえって昔からそうだよ。人の良さそうなそぶりみせてやたら正論並べ立てんの。んで自分は悪くありませんって——もう、それ偽善者っぽくて最悪だよな。俺、おまえのそういうところすげえムカついてた」

「偽善？おまえに俺がどう見えてるか知らないけど——そもそも安在のこと逆恨みしてんのは泰治だろ？んな腐った根性の奴に俺のことととやかく言われたくない」

俺は普段は争いは避けるけど、こんな風に避けられない状況なら売られた喧嘩は買うほうだ。

「ざけんなよ。」

「なんでここまで言われなきゃならないんだ！！」

「まず己のやろうとしたこと省みて海よりも深く反省しろつつ、このボケ！」

泰治を睨み返して臨戦態勢に入ると冷たい視線が返ってきた。

「おまえが俺の話に頷いた時点で共犯だろうが」

俺を押しつけ過ぎざまに言われた台詞に返す言葉が見つからない。

「なのにそれに目えつぶつて、自分を正当化しようとするところが偽善だっつってんだ」

目で追った先で振り返った泰治がニヤリと笑った。

俺は呆然とそれを見つめるしかできない。

「俺、おまえのことがガキのころから大嫌いなんだよ」

捨て台詞を残して泰治が校舎に消えた。

ガキの頃から大嫌いって……。

俺と泰治は幼稚園からのつきあいで、小学生の時は毎日のように遊んでたし――。

「嘘、だろお……」

その場に座り込んで俺はうつむく。

まさか10年以上も俺は泰治に嫌われてたんだろうか？

そう思うとさすがへこんだ。

こんなんじゃ授業に出る気になれない。

ああもういい、今日はサボろう。

投げやりな気分になった俺は塔屋の影に移動して座り込んだ。

泰治とはこれっきり縁が切れてしまっただろう。

心底嫌そうに大嫌いと言われた相手と仲良くしたいと思うほど俺はマゾじゃない。

中学で疎遠になったのは俺があいつに避けられたからだったのかもな。

自分の考えにまたへこんで、壁に背を預けながら長々とした溜め息を吐いた。

泰治の件は片付いたと思えばいいだろ、俺。

これで安在と大手を振ってつきあえるんだから。

目を閉じた俺の心に、ふとあることが思い浮かぶ。

俺が安在に告白した理由なんて、べつに彼女に話さなくてもいいんじゃないか？

なぜかいままで正直に話す気になっていたけど黙っていたっていい話だ。

告白した時はどうであれいまは彼女のことが好きだし、自分から嫌われるようなことをしなくても……。

そうだ、俺の良心がちくちく痛むなんてのはちょっと目を瞑ればいい。

安在のことを大切にして彼女に好かれるよう頑張るほうが、精神的にも穏やかでいられる。

「……って駄目かなー。やっぱ」

「ダメって何が？」

目の前に巽がしゃがみこんでいたことに驚いて俺は声をあげた。

「うわっ、巽！？」

「おはよ」

や、と手を上げる巽は相変わらず飄々としていて表情が読めない。

「な、んでここに」

「HRの途中で木戸が教室に入ってきたんだよ。で、航平のカバンはあるのにいないままだから、もしかしてあいつに呼び出されたのかと思って探しにきた——授業、始まるよ？」

「いい、サボる」

「ボコられて動けない？」

「そんなんじゃないからおまえは教室戻れ」

「わかった」

すく、と立ち上がって巽が消える。

扉の開閉音に俺は額をおさえた。

なにやってんだ、俺？

心配して探しに来てくれたあいつを邪険にあつかってこれじゃ八つ当たりだ。

しばらくして一時間目が始まるチャイムが鳴った。

自己嫌悪に陥った俺の前髪をぬるい風が揺らしていく。

休み時間になったら帰っかなあ。

いや、でも今日はまだ安在を見ていない。

俺がたまにでいいと言ってから弁当は毎日じゃなく、数日置きに作ってきてくれるようになった彼女だ。

今日は安在の弁当の日だしそれは食べたい。

なにより彼女の顔を見れば元気になれる気がする。

そこへ塔屋の扉が開いた音がした。

俺と同じサボリ組みかと思ったところで、カバンを手に巽が現れた。

「巽、おまえ教室戻ったはずじゃ？」

「うん、戻ってこれ持ってきた。航平はこれ」

カバンから少年誌を取り出しそのまま布製のそれを俺に手渡す。
中を見ればジャージが丸まって入っていた。

「ジャージ？」

「じゃなくて枕。それをこうやって頭に敷いて目を瞑ればあらず思議。数秒で夢の中という未来のネコ型ロボットがくれそんな快眠アイテム」

「なに？俺に寝ろってか？」

「そう」

「なんで？」

俺の隣に腰を降ろした巽は雑誌を広げながら言った。

「やなことあつてもぐっすり寝ておいしい物食べたら元気になるでしょ？お昼は安在さんのお弁当が待ってるしそれまで寝てれば？染みつけても怒んないよ」

「涎なんか垂らすか！」

「ふーん、航平って目から涎垂らすんだね」

ぺら、と雑誌を繰りながら巽に言われ俺は思わず顔をおさえた。
いや、どこも濡れてない。

「心配しなくても泣いてないよ。だって男の子だもん」

おい巽、そのまま沈黙しないでくれ。

どう突っ込んでいいかわからん。

俺は手にしたカバンを見つめ、しばらくあつて屋上に寝転がった。
巽の言動を理解しようとしたって俺には無理だ。
目を閉じたところで巽の声がした。

「今日のお弁当のおかずはハンバーグとコロッケだって」

「なんでおまえがそんなこと知ってたんだよ？」

「俺、安在さんとメル友だから」

はあっ？いつの間に！？

ぎょつとして目を開けると巽が俺に向かってピースしていた。

「俺ってすごいよね」

「悪かったな、マメじゃなくて」

もともとからしてメールを頻繁に使う人間じゃないし、書いたとしてもほぼ要件のみだし。

けどこれでも安在からのメールにはちゃんと返信するようにしてるんだ。

や、返信つつつても簡潔なんだけど。

んで俺からメールしたことはほとんどない……――。

だめじゃん、俺。

安在に冷たい彼氏って思われてんじゃないかって気がしてきた。

「うん、まあマメとかそういう話でもいいけど」

なんか別の意味で言ったのか？

じゃあなにがすごいんだ。

そう思ったが問い返す気にはなれなくて俺はもう一度目を瞑った。

巽が雑誌を繰る音やグラウンドからホイッスルの音がする。

制服が半袖に替わったからか、屋上に寝転がると腕に小石が当たって地味に痛いな。

俺は小石を避けるように胸の上で腕を組みつつ、制服の背中側が汚れてるだろうと、そんなどうでもいいことを思った。

* * *

カシャ、と電子音がしたことで俺は気がついた。
いまのはなんの音だ？

それに間近に人の気配がする。

巽か？と目を開けると、安在の顔があって俺は飛び起きた。

「あ、起きた。おはよう」

「安在？なんでここにいてるわけ？もしかしてもう昼！？」

「ううん、まだ。成山君にメールもらったの。西嶋君が屋上で討ち死にしているからって——寝不足？それとも気分悪いの？」
心配そうな顔になる彼女に俺は慌てて首を振った。

「ちよつと気分的にダレてサボってただけだから。それより巽は？」
雑誌を読んでいたはずの巽がいない。

「別の漫画を持ってくるって教室に行っちゃた。すぐ戻ってくると
思う」

携帯で時間を確認すれば3時間目が終わったばかりの時間だった。
俺、マジ寝してたのか。

塔屋の影は随分と短くなって足元は日の光にさらされてる。
どうりで暑かったはずだ。

「よいしょ」という安在の声に俺は目を向けた。
日陰に座り込んで見慣れた大きなカバンを脇に中身を取り出そうと
してる。

「何してんの？」

「少し早いけどお弁当の用意。うちのクラス、次は自習になったからわたしもここにいます」

「や、いくら自習でも教室にいないとマズイだろ」

「じゃあ西嶋君は？」

尋ねられて俺は言葉に詰まった。

「何かあったの？」

重ねて尋ねてきた彼女の顔が曇ったため俺はとっさに笑顔を作る。

「わかった。ちゃんと授業受ける」

「西嶋君、わたし授業に出てとかそういうつもりじゃなくて――」

「ちょっとやなことがあつて不貞腐れてただけだから」

「嫌なこと？」

「ん。でも寝たら復活した」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

立ち上がった俺は制服の汚れをはたき、巽の枕代わりのカバンと安在が持つてきた弁当入りのカバンを手にして、彼女を見下ろした。

「心配してくれてありがとな」

俺を見上げる安在がやっとホッとしたような顔になった。

並んで階段を下りながら俺はチラを彼女を盗み見た。

柔らかそうなふわふわの髪がいつものように軽やかに揺れている。

この髪に触れたいと思った。

手を伸ばしかける俺は、けれど寸前でやめた。

いまのままじゃ触れられない気がしたからだ。

やっぱり彼女に全部話さなきゃいけないんじゃないか？

でないと俺はずっと後ろめたい気持ちを持ち続けて、安在と接し続けなくてはいけなくなる。

そしてその気持ちがある限り彼女に触れられない気がする。

そんなのは嫌だ。

手を繋いだとき自分でも馬鹿になったんじゃないかと思うくらい嬉しかった。

また繋ぎたい。

彼女と向き合って心から笑いあいたい。

俺はぐ、と手を拳に握った。

安在にすべてを話して、その後はちゃんと謝ろう。

そしてもう一度、彼女に好きだと伝えよう。

振られるかもと弱気なことが頭をよぎるのを無理やり無視する。

ちょうど3年のクラスが続く2階に降り立ったところで俺は彼女に呼びかけた。

「なに？」

俺を見つめる眼差しは無邪気で優しい。

「放課後、ちよつと話しがあるんだけどいいかな？」

俺がこう言ったとたん安在の顔色が見る間に変わった。

「話って？いまじゃ、駄目なの？」

「ん、大事な話だから」

「そ、そっか」

明らかに作り笑いとわかる笑顔を浮かべる彼女はなぜか泣きそうだなんでこんな顔するんだ？

「安——」

「あれ？自主休講はもう終わりなの？もつと青春を謳歌しようよ」

数冊の漫画を手に異が現れ、俺たちの微妙な雰囲気気づいたのか眉を寄せた。

「どうしたの？」

「な、なんでもないよ？あ、じゃあ西嶋君。4時間目が終わったらいつもみたいに——」

取り繕う安在が不自然に言葉を途切れさせたため、俺は彼女の視線を追って後ろを振り返った。

見れば薄ら笑いを浮かべた泰治がこちらに近づいてくるところだった。

「よお航平、もしかして授業サボってたのは彼女と校内デートするためか？」

俺たち3人の側に立つ泰治を見て俺は嫌な予感がした。

「安在、巽と先に教室戻ってくれ」

俺の言葉を受けて巽が彼女を呼ぶ。

「行こっか、安在さん」

「え？あ、うん」

「ちよつと待つて、安在。俺、面白い話知ってるんだけどさ」

言いながら泰治はチラと俺に視線を向けて笑った。

こいつ、話す気だ。

直感的に思っただけ俺は泰治の腕を掴む。

「黙れ、泰治。——巽、安在連れてけ」

「なんだよ、俺が悪者みたいじゃね？俺はただ真実を安在に教えてやろうとしてるだけだろ」

「黙れつつってんだろが」

俺が安在に話すことなんだ。

他人の口から伝えられたくない。

泰治は俺の手を力任せに振り払った。

「はっ、必死だな。安在、よく聞けよ。こいつがおまえに告ったの
つて——」

「知ってる」

泰治の声を遮る安在の言葉に俺は一瞬眉を寄せる。

知ってる？

……何を？

彼女はさっき見せた泣きそうな顔で微笑んだ。

「——全部知ってるよ、わたし」

俺は驚愕のあまり息を飲んでいた。

7 離姫視点

わたしの目が悪くなり始めたのは中学に入った頃からだ。
3年間ずっと眼鏡をかけていた。

亡くなった曾祖母が西洋人で、ひ孫のはずのわたしはなぜかその血を色濃く受け継いでしまった。

瞳や髪の色が薄く顔立ちだって日本人とは言い難い。

小学生のときそのことをからかわれ、自分は一つ間違えば人から省かれる外見をしているんだと知った。

それからわたしは極力目立たないように思うようになって、いつも顔を隠すようになってしまった。

きつと目にかかるほど前髪を伸ばしていたことが視力を落とした原因だろう。

そんなわたしにとって眼鏡はいいアイテムだった。

分厚いレンズとそれを支える縁の太いフレームは、顔を隠すのに役立ってくれたから。

もともとわたしは活発ではなかったし、自分からなにか率先してやるタイプではなかったので、きつと仲の良かった子以外、中学の時の同級生の記憶には薄い存在となっているんだろう。

それでいいし、そうやって生きていくんだと思っていた。

* * *

「雛姫！もう合格発表張り出されてる時間だよ。急がなきゃ」

「ひな、置いてくよ」

「ま、待つて。わたし足早くないし走ったら眼鏡がズレるから……」
中3の冬。

受験した高校の門をくぐって、息も絶え絶えに訴えるわたしを彼女らは無情にも見捨てた。

「も、あんたは後でゆっくり来な」

「先行くからねっ！」

あ、ひどい。

本当に置いてった。

二人は元陸上部と元バレー部だもん。

そりゃ体力に自信あるんだろうけどわたしは元料理部。

つまり文科系ではつきりって運動音痴だ。

もう歩いちゃおうかなあ。

でも早く合格発表を見て家と学校に連絡しなきゃだし。

一瞬の葛藤の末、走り続けることを選んだわたしは足元を見つめる。
頑張れ、わたしの足。

一歩一歩確実に。

マラソン大会でも同じことを思ってた走りきった記憶を辿り自分に喝を入れた。

マラソン大会より全然距離は短いもん、大丈夫。

唇から息を吐くたび白く煙り消えていく。

肩から落ちてきたマフラーを巻きなおしたところで、

「うわ、ちょ……前見て、前」

知らない声に顔をあげたときには遅かった。

人がいる！

相手の人はうまくわたしを避けてくれたけれど、よれよれ走っていたわたしは電灯の柱にぶつかっていた。
いったあい！

急ブレーキをかけるように足を踏ん張ったのに。
額を押さえつつ目を瞬くわたしは、眼鏡がかるうじて顔に引っかかっていることに気づいた。

「大丈夫……、か？」

控えめにかけられた声にわたしは我に返って、斜めを向いている眼鏡を慌ててかけなおした。

もうなにこれ、コント！？

恥ずかしさに急激に顔が熱くなってくる。

声をかけてくれた相手に目を向けたわたしは、ファスナーが開いたコートからのぞく学ランに気づいて硬直した。

男の子だ！

異性というだけで緊張してしまうわたしは、そのまま凍りついたように顔をあげられなくなった。

かといってこのまま相手を見ないのも変じゃないかな。

あ、そうだ！

とつさにいい考えが思いついてわたしは頭をさげた。

これなら顔をあげなくてすむ。

「だ、大丈夫です。ごめんなさい」

勢いよくお辞儀をしたせいか眼鏡がズレてくる。

「や、俺は平気だけど……怪我は？」

「ないです」

「でもゴンって音してたし」

いやあああつ。

そんないい音響かせてたの、わたし！？

恥ずかしすぎる。

「いえ、ほんとに平気ですからっ！」

「そっか」としばらくあつて相手の靴が動くのが見えた。

このまま立ち去ってください。

そんなことを思いながらわたしはまたしてもズレる眼鏡を直す。少しフレームが大きめだったからよくズレる眼鏡だったけれど、いつもより鼻を滑るのはどうしてかな。

……あれ？

左の蝶番のところグラグラしてない？

「嘘、壊れた!？」

眼鏡を外して確認するとフレームが歪んで、今にも蝶番のところまで折れてしまいそうだ。

これ、眼鏡屋さんで直せるのかな。

新調しなおすことになったらお母さんに叱られるー。

ていうかこの眼鏡かけてても大丈夫？

そうつとわたしが眼鏡を顔にかけ直したところで声がした。

「なんか、壊れたって聞こえたけど？」

「え？」

振り返ってわたしは飛びのきそうになった。

知らない男の子がいるっ！

「眼鏡、平気？」

この声、さっきの人だ。

わたしが壊れたって言ったから戻ってきてくれたの？

「だ、ただ大丈夫です——ほら、この通り……あっ」

わたしが眼鏡を外した瞬間、金具がパキと小さな音を立てて折れてしまった。

わたし、いま自分で止めをさしちゃった？

「お、折れちゃった」

「眼鏡なかったら合格発表の番号見えないんじゃないか？それとも

もう見たあと？」

「まだ見てないです。でも片方の柄の部分は生きてるからこうやって手で持っていれば——」

右側のテンブルを耳に引く掛け彼に向き直ったわたしは、まともに目が合っただけで目をそらした。

あ、嫌な態度とっちゃったかな？

誤解しないで。

初対面の、しかも男の子相手だから緊張してるだけなの。胸中でいくら言い訳したって彼に伝わるはずもない。

「でもグラついてるじゃん？なんなら俺、一緒に行くけど？」

「え、一緒に？」

「ん、だってそれかけて歩きにくいだろ？」

「そんな。悪いしいいです。友達がいますから」

「友達？どこにいの？」

「合否が知りたくで先に走って行っちゃって——わたしさっき、それを追っかけてたんです。えと……眼鏡は外してゆっくり歩いていきますから大丈夫です。それにこの眼鏡、少し大きめだからグラついてるだけで……あの、いつもよくズレてきてたし」

緊張のため余計なことまでぺらぺらとしゃべってしまった。変な子だって思われたらどうしよう。

そう思うと余計に焦って緊張も高まり、頬がどんどん熱くなる。たぶんわたし、顔が真っ赤だ。

走ったせいだっと思ってくれないかな？

「それさ」

「え？」

「眼鏡似合っていないんじゃない？外しとけば？」
に、似合っていないから外せ？

確かに顔を隠せるようにってレンズ部分が大きな眼鏡にしたけど。

弟に「ダッセえ」と言われ続けてる眼鏡だけどつ。

友達は控えめに他の眼鏡もいいかもよって言うのよ？

他人なら気を遣ってそう言うと思うのに。

……初対面なのにはつきり言う人だなあ。

わたしと正反対の人みたい。

「でも目が悪いわたしには必要で——」

「コンタクトないの？」

そんな顔が隠せなくなるものをわたしが持つてるはずもない。

「持つてないです」

「あー、まあそっか。眼鏡かけてんだもんね」

もしかして眼鏡が嫌いなのかな？

遠近感が掴みにくくてやだって人いるもんね。

てことはこの人も目が悪いのかな。

コンタクト？

でも眼鏡かけても似合うと思うんだけどな。

かっこいい人だもん。

いいなあ、わたしの憧れの日本人らしい黒い髪に黒い目してる。

声もいいよね。

凜としてるっていうか、よく通りそう。

メタリックな細いフレームをかけたらどうか？

ちよっと優等生ちつくになってそれはそれでまたかっこいいかも！！

……ん？かっこいい？

そこで、はたと我に返ったわたしは悲鳴をあげそうになった。

なんで地味なわたしがこんなモテそうな男の子とお話してるのお！？

うつん、それよりも！

学校じゃ男の子に見向きもされないわたしに、どうしてこの人は普通
通に話しかけてくるの！？

もしかしてわたしが眼鏡を壊して困ってたから？
うん、きつとそうだ。

この人すごく優しい人なのね。

「モテそう」じゃなくて、絶対学校で「モテる」んだろうなあ。

あ、だから女の子と話すのも慣れてるのかな。

「俺がつきそうにしてもちよつと待ってもらっていいかな。友達が親に合格した連絡するって携帯持ったままどこかに……またどっかで漫画読んでんじゃないだらな」

合格発表もう見たんだ。

「合格……」

「へ？」

「あの……合格したんですか？」

つて、思わずなに聞いちゃってるの、わたし！？

「あ、俺？——うん。春からこの1年」

そう言った彼が堪えきれない様子で嬉しそうに笑う。

笑……った？

その顔を見た瞬間、わたしの胸がドキンと跳ねる。

嘘、なんかイメージ変わる。

ちょ……この人、笑顔が可愛い。

男の子に可愛いって嫌がられるかもだけど——やだ、胸がドキドキするう。

「ひーなー！もう遅い！」

いきなり遠くから大声で名前を呼ばれてわたしは驚いてそちらを向いた。

「合格発表あんたの分も見てきてやったよー」

「皆合格！続き番号誰もぬけてないっ。嬉しい」。また3年一緒だねえ」

冷たくわたしを見捨てたはずの友達が、満面の笑顔で手を振って駆

けてくるのがわかった。

「友達？」

彼が二人からわたしに目を向け尋ねてきたため頷いた。

「そっか。やったじゃん。合格、おめでと」

「あ、合格……え！？わたし、合格！？」

「じゃないの？友達がそう言ってたんだし」

遅れて合格の言葉に反応するわたしに彼はクスリと小さく笑った。
わ、また笑ってる。

「俺がつきそわなくても大丈夫そうだな——あ、あいつあんなところに……んじゃ俺はこれで」

立ち去る彼の背中を見つめるわたしは、後ろから友達に飛びつかれるまてぼうつとしてた。

「ちよつとひな、いまの誰？知り合い？ちよつとよくない？」

「知らない……」

「知らない？雛姫、いつも学校の男と話すのも緊張してるのによく——って何！？あんた、その眼鏡壊れてない？」

「あ、ホントだ。まさかあいつに壊されたの？」

「え？違うつ。あの人わたしは眼鏡を壊して困ってたから助けてくれようとして……あ！わたしお礼も何も言ってる。合格おめでとうって言うてくれたのにい……」

わーん、わたしの馬鹿。

せめて「ありがとう」って言えばよかった。

後悔したけれど後の祭り。既に彼は人に紛れてわからなくなっていた。

4月、あの人に会えるんだよね。

そしたら名前だってわかるよね。

もしかしたら同じクラスになれるかもしれない。

春に会ったときあの人わたしのこと覚えててくれるかな。

8 離姫視点

移動教室からの帰り、階段を降りてくる彼にわたしは気づいた。今日もまた食堂にパンを買いに行くのかな？

あ、このまま進めばすれ違える。

急ぎ足の彼はわたしに目もくれず階段を駆け降りてく。

パンが売り切れちゃうと困るもんね。

すれ違いざま彼が巻き起こした風がわたしの頬を撫でていくのがくすぐったい。

友達ならこういうとき「今日もパン？」なんて話しかけることもできるのに。

そしたらきつと「おう！」って笑ってくれるんだろうな。

「ひーなあー？あんたいつまでこの状態続ける気？」

「ホントだよ。もうわたしたち高3だよ？片想い3年目突入って

……あー、あり得ない」

「ちよ、ゆんちゃん、ようちゃん、シー！！」

誰かに聞かれると、わたしは二人を引っ張って空き教室に飛び込んだ。

中学から仲良しで一緒に合格発表まで見に来た彼女たちとは、1年のときゆんちゃんとクラスが離れてしまったけれど、3年になって全員同じクラスになった。

そして彼、西嶋航平君とは一度も同じクラスになれないまま。

進路別にクラスが分かれちゃう3年で、わたしは文系、西嶋君は理系を選択したから、高3のいま同じクラスは絶対ないよね。

「シー、じゃなあい！ひな、この3年でやっと西嶋と隣のクラスに

なれたんでしょ！？あいつって昼はいつもああやって昼ご飯買いに飛び出してくんだから、それを狙ってぶつかるとかやってみな？」「ゆんちゃん、わたしにそんなベタな漫画みたいなことしろって言うの？」

「それ一昔前の出会い方でしょ」

「一昔前も何も雛姫は最初それで西嶋に出会ってるじゃない。しかもお約束の一目惚れって」

ようちゃん、違う。

わたしがぶつかったのは電灯の柱だから。

それに一目惚れっていうのは、相手のことを一目で好きになっちゃうことでしょ？

西嶋君に出会ったときのわたしは緊張してほとんど話もできなかったし、かつこいいて思ってたけどそれだけだったもの。

ただ笑顔がいいなあって印象に残ってて、入学してから探してみたりましたけれど。

で、いつのまにか西嶋君を探してしまうのが癖になっちゃったんだけれど。

どうしてそんなことしてしまうのなあって思ってた、そこでやっと西嶋君のことが好きなんだって気づいたのよ？

……なんて二人に話すのは恥ずかしいから言わない。

「そんなおいしい出会い方してるのに、なんで入学したとき西嶋に話しかけなかったかなあ？」「あのときはありがとう」でも「久しぶり」でも何でもよかったのに。——さすがにいま、その話題で話しかけるには遅すぎるよねえ」

「雛姫、いい？チャンスなんてこっちからもぎ取らないと、そうそううまく転がってないんだからね。せつかく入学前にわたしたちで雛姫を大改造して可愛くしたはずが……トホホだよ」

大改造？なんかリフォームした家みたい。

うん、でも確かに入学前の春休みはすごかった。

わたしがついucciかり二人に「高校じゃ眼鏡じゃなくてコンタクトにしようかな」って相談しちゃったら、理由を聞いただされてまだ名前も知らなかった西嶋君のことを話す羽目になった。

二人は合格発表の日のことを覚えていて、ははーんて意味ありげに笑ったつけ。

あのかきはちよつと気になる男の子が眼鏡は嫌いっぽいて、チラツと頭をよぎっただけなの。

だからすぐに思いなおしてやっぱりいいって言ったのに、思い立ったが吉日と勢いにおされて丸め込まれてしまった。

彼女たち曰く、わたしは女子力を上げなきゃだめだということだったから、きつと当時のわたしは自分が思う以上にひどい有様だったんだろつ。

眼鏡を新調して更にコンタクトまでなんて、スポンサーになるお母さんが絶対渋ると思っていたら、二人と話をしたお母さんはなぜか喜んでお金を出してくれた。

あれにはすごく驚いたけれど「雛姫がおしゃれに目覚めてくれて嬉しいわ」って言ってたから、母親ながらに娘のわたしが地味なのを気にしてたのかな？

そんなわけで半ば強引にコンタクトを買わされ、次に二人のおすすめの美容院に連れて行かれた。

髪を揃えるだけって言ってたはずが、顔を隠す前髪をばっさり切られて、わたしは蒼白になりながら騙されたと思ったけれど髪がくつつくわけもない。

それから肌や髪のお手入れの仕方とか、はやりのファッションだとか、女の子を磨くためにいろいろ叩き込まれた。

憧れの彼に可愛くなつて会いたいによって二人に言われたら、ど

ういうわけか言うことをきいちゃてたの。

それってやつぱり二人が言うように、合格発表のあの日、わたしは西嶋君に一目惚れしてたのかな？

でもそうやって頑張ったことも……さっきの通りまったく実を結んでないのだけれど。

「ご、ごめんね。でも入学したあとの西嶋君、全然わたしに気づかなかったし、忘れちゃうくらい印象に残ってないんだなあって思ったら、話しかける勇気が出なくて……」

「はあ？ ひなが西嶋に話しかけなかったのってそれが理由！？」
え？ そうです。

わたしが頷くと質問してきたゆんちゃんだけでなく、ようちゃんまで溜め息をついた。

「いくら外見を変えても中身が一緒じゃだめだわ。ひなの性格改革しなきゃ無理」

「まあ、控えめなところが雛姫のいいところでもあるんだけど——恋愛じゃ不利だよねえ」

ちよつと！

そこで残念そうな顔して首をふらないでっ。

なんかわたしが可愛そうな子みたいじゃない。

そんなわたしにようちゃんはビシッと指を突きつける。

「いい、雛姫。見つめてるだけじゃ事態は変わらないよ？ さっきも言ったけどわたしたちはもう高3なの。このまま何もしないで卒業しちゃっていいの？」

「ラッキーなことに西嶋ってずっとフリーじゃない。まああいつの場合ちよつと鈍感で、そういう雰囲気にもっていかうとしても無理だって聞いたけど……。でもそう思ってる子がいるってことは、ひなみたいにあいつのことを見てる子が他にもいるってことだよ！ あと一年しかないから絶対仕掛けてくるっ。西嶋が誰かときあっち

やってもいいの!？」

二人とも目がマジすぎるっ。

怖いってばあゝ。

教室の隅に追いやられたわたしは交互に彼女たちを見た。

「こ、告白したほうがいいってこと？」

「したほうがいいんじゃないかってしろっ！」

声がハモってます。

そして命令……部活の先輩ですか？

さすがは現役陸上部とバレー部の鬼部長。

「いまのあんたならイケるから！」

「昔ほど男の前で緊張もしなくなってるし、友達からはじめるって手もある！」

友達……うん、せめて西嶋君とお友達にはなりたくないなあ。

そうすればさつき階段で思ったような妄想が現実になるはずだし。

でも、いきなり知らない女の子からお友達にって言われても、西嶋君だって困ると思うんだけどな？

わたしだったら困るもん。

そう思ったけれど二人がわたしのことを応援してくれてるのはすごくよくわかる。

その気持ちが嬉しい。

「2年前二人が大改造してくれたおかげで、わたしでも可愛く変身できるんだってわかったの。あれで少しずつ自分に自信が持てるようになったよ。だから男の子の前で緊張することも減ったんだと思う。すごく感謝してるの。本当にありがとう」

わたしがそう言う彼女たちは顔を見合わせて、やがておかしそうに笑いだした。

「せっかく忠告してるのに——あーもう雛姫はそのままでもいいのかな？」

「へんに無理させたらひなのことだから大失態やらかしそう」

わたしの肩をようちゃんとうんちゃんがポンと叩く。

「お腹も空いたし話はここまでにしよ」

「とりあえず、お弁当食べよっか」

お弁当と聞いてクーとわたしのお腹が鳴った。

それが二人にも聞こえてしまったらしい。

わたしたちは笑いあって空き教室を後にした。

9 離姫視点

その日は朝からついていなかった。
まずコンタクトの片方をなくした。

そのせいで朝からばたばたして中間テスト最終日は遅刻寸前だった。
校内じゃ眼鏡姿を西嶋君に見られるかもって裸眼で歩くから、友達の顔はわからないし、同色の物は見分けが付きにくくて足とかぶつけるし。

とどめとばかりに放課後、担任につかまって資料作りを手伝わされるなんて…… もー、わたし今日は厄日なの？

担任に解放されたときには既に校舎に人の姿はほとんどなく、そろそろ昼食を終えた生徒たちの部活動の声や音がわたしの耳に届く。
よいしょとカバンを肩に抱えなおしたわたしはお腹をさすった。

お腹すいたなあ。

お腹の足しに帰り道の駄菓子屋さんでアイス買って帰ろう。

財布の中身を確認しつつ昇降口に向かったわたしは数人の人の気配に気づいた。

男の子たちのようだ。

声が聞こえてくるのは3年のシューズロッカーがある辺りだから同級生かな？

男の子に緊張することはなくなっただけれど数人いるとやっぱり身構える。

いなくなるのを待ってみようとわたしは足を止めた。

「あー、くそ！ムカツク…… 航平の野郎っ。 滝沢もあんなののどこがいいんだよ」

バンとロッカーの扉を閉める音と靴を投げ捨てる音がする。

「んなこと言ったって滝沢が西嶋を好きなのは西嶋のせいじゃ——」

え？もしかして西嶋君のこと言ってる！？

わたしはすぐに気がついて息を潜め、別の学年のシューズロッカーの陰に隠れた。

「うつせえ！あいつは昔っからあなんだよ。誰彼かまわず愛想振りまいて、相手をその気にさせるのがうまいんだ。ちやほやされてりやさぞかし気分いいだろうよ」

「ああ、おまえ同中だっけ？なに？西嶋ってそういう奴なの？」

「マジ？いい奴っぽいのには実は性格悪いってやつ？」

「あいつのは押し付けがましいしいんだって。やってやってるつつうの？自分が上って思ってるからそういう態度になるんじゃない？性格悪いってのよりそっちのが俺、嫌いなんだよ」

押し付けって……そういう人じゃないのに！

見ず知らずのわたしを助けようとしてくれた人なんだから。

誰だろうこの人。

どうしてこんなひどいこと言うの？

これじゃあ聞いている人が西嶋君のこと誤解しちゃう。

「確かにんな奴だったら鼻につくけど木戸が言うほどひどいか？俺前に物理教えてもらったけど普通だったぜ？つつか、あいつの教え方マジわかりやすかった」

「え？俺もわかんねえとこあんだよな。西嶋って物理できんだ？成山がトップだと思ってたけど、あいつ変わってっから教えてもらうのもちよっとって……会話、成立しなくね？成山と仲がいい西嶋ってすげえよなあ」

「あー、トップは成山。あいつ漫画ばっか読んでいつ勉強してんだって感じだけど、頭めちゃくちやいいらしいぞ。天才と変人は紙一重ってやつじゃん？」

あ、よかった。

他の人は西嶋君のよさをちゃんとわかってる人たちだ。

話からすると彼らは西嶋君と同じクラスみたい。

西嶋君のことを嫌ってるらしい木戸君ってどんな人だっけ？

そこにまたバンという大きな音が響いてわたしは驚いて身を竦ませた。

シューズロッカーを叩いたようだ。

「おまえらなあ」

「あ、悪い悪い。えーと、女なんていくらでもいるじゃん？」

「友達に合コンセッティングしてもらうか？……って俺ら受験生じやーん」

ふざけたように笑う男の子たちの声に混じって苛立ったような声がある。

「いらねえよ。つか俺がムカついてんのは航平にだ。あいつも俺と同じ目にあわせてやりてえ」

「同じ目って……西嶋の好きなやつ知ってんの？」

「んなの知らなくてもいいんだよ。絶対うまくいかないような女に告らせて、振られるとこ見りゃとりあえず気はおさまる。——ああ、隣のクラスの安在とかよくね？あいつ、フリーなのにどんな奴に告られてもOKしないらしいじゃん」

わたしは自分の名前が出たことにぎょっとした。

なんでいきなりわたしが出てくるの。

「え？それちげーよ。安在って年上の彼氏がいるだろ。すげえ金持ちの男。高級車の助手席に乗ってたのを見たって奴いるし」

はいっ！？

そんな人いません。

きつと人違いだからっ！

それからどんな人に告白されてもっていうのも誤解を生むと思うの。高1のとき一度呼び出されて告白かと思ったけれど、あれだって結局質問されただけで、どれだけ自意識過剰だってすごく恥ずかし

かったもの。

あのときは確か……好きな奴いるのって聞かれて正直にいるって答えたら、どんな奴って更に質問されたんだよね。

西嶋君のことを言いたくなかったから、悪いと思ったけれど適当な言い訳を——んん？

あ、そうだ！思い出した。

西嶋君を想像されないように、当時ハマってたドラマの男のひととを答えちゃったんだ。

大金持ちの御曹司で外車に乗ってる年上のイケメン王子様設定だった。

あまりにありえないキャラだったからか、何度か同じようなこと尋ねてくる人がいて、わたしも嘘って言えないまま強引にその設定で押し通したつけ。

まさかあの話が一人歩きしてるの！？

「へえ、安在って彼氏いたのか——でも木戸、どうやって西嶋を安在に告らせるわけ？」

「んなの簡単だ。おだてて頼めばいいんだよ。安在もおまえにならなびく——みたいなこと言って持ち上げりゃ、勘違い野郎のあいつならすぐその気になって口説こうとすんじゃね？もし乗ってこなくても脅すって手もあるしな。ガキの頃から知ってっからネタならあんだよ」

「おつまえ、いますんげえ悪い顔してんぞー？嫉妬もほどほどにしとけよな。俺、西嶋のこと嫌いじゃないしノータッチで通すぞ」

「俺も聞かなかったってことで。——つつかさあー、嫌いな奴なんて無視すりゃいいのに」

え？

お友達の人、スルーしちゃうの！？

そこは止めてよ！

わたしは焦ったけれど会話に割って入れるはずもなく……。

「おまえらのことなんて頼りにしてねーよ。帰んぞ」

足音とともに木戸君という人の声が遠ざかり、彼が昇降口から出て行くのがわかった。

遅れて溜め息が聞こえる。

「あーもー、なんだあいつ？ガキか？俺、西嶋に同情するわー」

「完璧にとばっちりだもんな」

やれやれというような残りの二人の声も遠ざかっていく。

わたしは充分に時間をおいてそっと出入口を窺った。

人の姿はない。

そこでやつと気が抜けて長い息を吐くと、その場にしゃがみこんだ。ひどい、とただ思う。

自分の好きな子が西嶋君を好きだったからって、腹いせに同じ目にあわせてやるなんて、どうしてそんなことを思いつくの？

なんでも誰かのせいにしてしまう人がいるけれど、木戸君という人はそういうタイプではないかと思う。

それに言うことを聞かないなら脅してでも自分の思い通りにしようって——もうその考え方からしてわかんない。

「決めた」

うずくまっていたわたしは顔を上げた。

もし、西嶋君がわたしに告白してきたら絶対に断らない。

木戸君の思い通りになんてさせないんだから！

それにどんな理由でも西嶋君とつきあえるチャンスがあるなら、わたしはそれをみすみす見逃したくないの。

今日までずっと片想いしてきたんだもん。

嘘でも西嶋君の彼女になれるならなってみたい。

「——告白してこないことだってあるんだし……」
ついそんなことを言葉にしまったのは自分への言い訳だったの
かもしれない。

木戸君の悪巧みに便乗して、西嶋君の彼女におさまろうとしてる自
分の狡さから目をそらしたくて。
でもきつとね。

つきあうことになったとしてもすぐに終わっちゃうの。

だって西嶋君は正直な人だもん。

好きでもないわたしとつきあうのは駄目だって、早いうちに別れよ
うと思う。

だから「もしかして」が起こったそのときは——。
少しの間だけわたし……夢を見てもいいよね？

10 離姫視点

「安在さん。突然で驚くと思うけど好きです。俺とつきあってください」

わたしが期待した「もしかして」は数日とおかずにすぐにやってきた。

でも目の前にいるのは本当に西嶋君かな？

2年以上、彼とは接点がもてなかったのに、いきなり「呼び出し」そして「告白」なんて有り得ないと思うの！

わたしはぼやける視界に目を凝らす。

うーん、裸眼じゃわかんない。

ちょっと近づいてみようかな。

「西嶋君？——本当に？」

正真正銘、本物の西嶋君ですか？

わたしは更に目を凝らして西嶋君であろっ人を見上げる。

よし、ここはしつこいくらいに確認してしまおう。

「3年2組、西嶋航平君」

「はい」

返事をする声は西嶋君で、さっきより近くなった相手はまだぼやけるけど、やっぱり西嶋君な気がする。

思った瞬間わたしは後ろに飛びのいていた。

あんなに間近に西嶋君がいたのって合格発表のとき以来だ。

きやあああ、ありえないくらいドキドキする。

裸眼でよく見えてなくてこれだから、コンタクト買ったあとはまともに見えないかもっ。

「どうしよう……本物だった……」

わたし、本当にこの告白をOKするつもり？

こんな調子じゃ心臓破裂死するんじゃないの？

「やつぱり……無理かも」

うつん、弱気になっちゃ駄目。

西嶋君の彼女に一瞬でもなれるんだからここはもう開き直れ、わたし！

「安在さん？」

「あ、はい、なんでしょう？」

「や、なんでしょうじゃなくて——俺、返事聞いていいかな？」

「そ……そうですね。すみません」
いけない。

返事しなきゃだった。

「よろしく願います」

そう言っただけの返事が西嶋君にはよく聞こえなかったみたい。

もう一回言っただけで言われちゃった。

わかりやすい別の言い方がいいのかな？

「はい」とか？

でもそれじゃ短くない？

「よろしく願います？」

いい返事が思い浮かばなくて結局同じ言葉を馬鹿みたいに繰り返す。
伝わった……かな？

あれ、頭押さえちゃった。

「聞き間違いだな。もう一回聞いていい？」

わたし、滑舌が悪いの？

ここはよくわかるようにお辞儀もつけてみよう。

「今日からよろしく願います。西嶋君」

さすがにちゃんと伝わったよね？

顔を上げると西嶋君が固まっている。

そのせいでわたしは気がついた。

そうか、西嶋君はわたしに断ってほしかったんだ。

木戸君に脅されてわたしに告白してるんだもの。

OKなんてされても困るだけか。

でもごめんなさい。

木戸君の思い通りにはさせたくないし、わたしもあなたの彼女になりたいの。

短い間でいいから隣にいさせて？

その間に、もし彼女になれたらやってみたいって妄想してたことできるだけたくさんしてみたい。

だから――。

「あの、西嶋君。今日から一緒に帰りませんか？」

「え？」

「せっかく彼女になったんですから恋人同士っぽいことがしたいです」

「あ、……ああ――うん」

戸惑う様子の彼を見たわたしの胸がチクリと痛む。

やっぱり困らせてるなあ。

「じゃあ昇降口で待っていてください。教室にカバンを置いたままなので取ってきますね」

いまのはなかったことに、って西嶋君に言われるのが怖くて、わたしは急いでその場を後にした。

ちよつとだけ。

少しの間だけ。

教室でカバンを取ったわたしは昇降口に向かいながら何度も繰り返す。

西嶋君が別れたいって言うてきたらすんなり受け入れるから。

あなたのことが好きだと言って、困らせたりしないようにする。
でも別れた後、友達になってもらえないかな？
そのときはそう尋ねてもいいですか。

* * *

「眼鏡持っていないの？」

シューズロッカーの前でわたしは、毛糸を虫と勘違いした自分の勘違いを呪いたくなった。

普段やらないような無理をしたら大失態をやらかすと言ったゆんちやんたちって、わたしのことをよくわかってるよね。

「かければ？さっきまで俺、睨まれてるのかと思ってたし」

ごめんなさい！

そんなつもりまったくくないの。

ただ西嶋君はわたしに眼鏡が似合わないって言ってたから、あなたに眼鏡姿をあまり見せたくなくて――。

とにかくここは話をそらしてみよう。

「コンタクト、片方なくしてしまって週末に新しい物を作りに行くつもりですから」

「うん。でも眼鏡かけないと危くないか？目、かなり悪いんじゃないの？」

うわーん、話をそらせないい。

西嶋君は心配してくれてるだけのに頑なに拒むのもなあ……。

うう、わかりました、かけます。

恥を忍んで。

「なんで顔隠すわけ？」

だから似合わないの！

最初にそう言ったのは西嶋君だもんっ。

好きな人の前じゃ可愛く見られたっていう乙女心をわかってよう。
」。

泣きたい気持ちで恐る恐る西嶋君を見れば、

「いつもと違って優等生っぽくなるけど別に变じゃないじゃん。やっぱ怪我したら危ないしコンタクト買うまでかけてるほうがいいって——」

普通にそう言われた。

ええ！？

似合わないって言わない？

なんで？

驚いたわたしだけど、更に彼から驚きの発言があった。

「日常生活に支障きたしてるだろ、安在の場合」

「安在さん」から「安在」に変わった！？

「呼び捨て……」

やだやだ、嬉しい。

気を許してくれたのかな？

なんだか西嶋君に近づけたって気がする！

「ごめん、つい。安在さんでした」

「呼び捨てがいいです。でも、できれば名字じゃなくて名前……雛姫って——」

言ってしまったからハツとした。

わたし、舞い上がってなんて大胆なこと言っちゃったんだろう！
！
そう思うと顔が熱くなってくる。

西嶋君、引いてない？

つきあつたばかりでもう彼女面してるって思われたらどうしよう。

「名前……？や、いきなりハードル上げすぎ。そこは安在で。それから安在も俺への敬語やめて。同い年だし」

「うん、わかつた」

良かった、引いてないみたい。

ホツとするわたしは西嶋君が口を押さえるのを見た。

「かわ——」

カワ…… ってなに？

皮？…… 違うか。

なんだろう。

よくわからなくて彼に目を向けた。

あ、もしかして——。

「川？」

暑いから泳ぎたいとかそういう話？

というかこの辺りで泳げる川なんてあつたかな？

それにわたし、水泳苦手で浮くぐらいしかできないの。

だから川だとどんぶらこっこって流されてっちゃうと思う。

「や、なんでもない。それより俺、電車通んだけど安在は？」

「わたしも」

「そ、んじゃ帰ろう」

話題を変えたのは会話が続かない奴って呆れたから？

わたしは西嶋君の隣を歩きながらおろおろと話題を探す。

えと、何を話せばいいんだろう？

趣味？好きな食べ物？得意な教科？…… っで一問一答ですか！？

ううん、そこから話を膨らませれば！

—— そんな芸当わたしにできるの？

いまだって西嶋君の横に並んでるってだけでドキドキして、どんな話を振ればいいかわからないのに！

その時わたしは西嶋君から視線を感じた。
なに、何？

やっぱりわたしとじゃつまんないとか思ってる？
それとももう別れ話とか！？

「西嶋、君……なにかな？」

「えー……なんでもない」

ビクビクとわたしが尋ねると西嶋君は首を振った。
よかった。

別れ話じゃなかったみたい。

「もしかしてつまらない？」

だけどそれならわたしが思い当たるのはこっちしかない。

「わたし、話もしなかったもんね。き、緊張して何を話したらいいか。あつ、でも緊張って言っても困ってるとかじゃなくてね。男の子とこっやって並んで歩くとか初めてだから……って、あああ何言ってるんだろっ、わたし」

もうやだ。

緊張したら余計なことまでしゃべっちゃうのは、あの頃と全然かわってない。

わたし、なんでこんななのかな——恥ずかしい。

「話って別になんでもいいと思うけど」
なんでも？本当に？

昨日なにをしたとか、テレビの話とか、そゆのでいいの？
え……「はいどうぞ」って言われても——うん、じゃあ頑張ってみる。

「一言ですまさないで話題を膨らませてね」

「努力します」

そう言った西嶋君の口調がからかってるみたい。

わたしはいっぱいっぱいなのに西嶋君は余裕なんだ！

わたしばかりどきどきしてるのがなんだか悔しい。

「なんで敬語なの？わたしが使うのヤダって言ったくせに」

「話してんじゃん、俺たち。無理しないでこんなんでもいいんじゃないの？ずーっと話してなきゃいけないってわけでもないし、沈黙になったときは別にそれでもいいと思うけど」

西嶋君の言葉にわたしは驚く。

「もしかして西嶋君、ここまで沈黙だったのも全然気にならなかったの？」

西嶋君と何を話そうとか、つまらない子って思われてない？とか、ずーっとグルグルしてたわたしって……。

「え？安在気になんの？」

沈黙が続けば誰だって気になるでしょう！？

「そりや嫌いな奴とだったら沈黙は気まずいけど。俺、一緒にいる奴と空間を共有してる空気とか好きなんだよな」

知らなかった……西嶋君って我が道を突き進むタイプなんだ。

ただどねえいまっ、「嫌いな奴とだったら沈黙は気まずいけど」って言ったよね？

で、西嶋君はわたしといっても沈黙を気にしてなかったんだよね？

うわぁい。

わたし、西嶋君に嫌われてないんだ。

そう思うと自然に顔が綻んでしまう。

「そっかぁ」

それにあなたの好きなことが一つ知れたよ。

空間の共有ってそんなこと考えたこともなかった。

うん、でもそうだね。

一緒にいるってそういうこと。

あなたが好きだっていうこの空気をきくとわたしも好きになると思う。

西嶋君の隣を並んで歩きながら、わたしの体から緊張が嘘のように解けた。

自然体でいていいって言ってくれた気がしたから。

「西嶋君って駅からどっち方面の電車に乗るの？」

肩から力が抜けたとたん、わたしはすんなり彼に話しかけることができた。

「ん、俺？俺は——」

さっき西嶋君がわたしを呼び捨てにして近づいてくれた分、わたしもこうやって少しずつ近づいていきたいな。

チラと見上げる彼の横顔をわたしは目に焼きつけた。

11 雛姫視点

次の日の朝、登校したとたんわたしは親友たちに両腕をとられて、人気のないトイレに連れて行かれた。

朝からトイレって……イヤガラセの定番場所だよ、二人とも？

「雛姫、あんた西嶋となんかあった？」

「昨日ひなと西嶋が一緒に帰ってたって聞いたけど？」
もう広まってるの？

やっぱり見てた人いるんだ。

わたしを見つめる二人の声が揃う。

「もしかしてつきあうことになったの!？」

「うん」

わたしが頷くと彼女たちは一斉に抱きついてきた。

「やったじゃん!ひな」

「まさかあんたが告白できるわけないし……向こうから？」

「そう」

わたし、嘘は言っていないよね？

「ただずーっと西嶋を見てるだけだった雛姫なのに、こんな急展開——いきなりすぎてびっくりだよ」

「あいつ、ひなの視線に気づいてあんたのこと気になりだしたんじゃない？」

いいえ、それはないです。

だって西嶋君はわたしのこと好きでもなんでもないもん。

でもそれをゆんちゃんとうちゃんには言えない。

言えばどういふことかと彼女たちは尋ねてくるはずだから。

わたしは昇降口で聞いた木戸君の話や、そこから西嶋君とつきあう

ことになった経緯すべてを、二人に話す気はなかった。
優しい二人のことだもの。

わたしのために怒ってくれるでしょう？

それとも何もかもを承知で西嶋君とつきあうことを選んだわたしに
悲しむのかな？

だからね、何も言わないでおくの。

西嶋君と別れたときは、理想化しすぎてたみたいって誤魔化すこと
に決めてる。

つきあつてすぐに別れるなんて、相手と合わなかったって理由がき
つと一番多いはず。

だからそれが一番、理由としてありそうでしょう？

でも本当の彼は以前と変わらず優しくて実はマイペースなのよ？

当たり前だけどわたしと違った考え方をして、素敵なものの見方を
する人だった。

それに昨日の別れ際、わたしが笑顔を向けると同じように笑っても
くれたの。

西嶋君の笑顔は2年が経つて断然男っぽくなっていて、それでもや
っぱり可愛いからわたしはドキドキが止まらなかった。

そうやって彼について集める小さな発見は、わたしの大切な宝物に
なっていくの。

少しずつ、心の中にたまっていくのが嬉しい。

でもそれがさらにわたしの気持ちを募らせ、彼に胸を焦がす結果と
なってしまうってわかってる。

そして最後まで西嶋君に好きだって言えないまま、この恋は終わ
ってしまうんだろうな――。

「良かったね」って自分たちのことのように喜んでくれるゆんちゃ

んとうちゃんに、わたしは曖昧に笑うことしかできなかった。

* * *

お昼休みの屋上でお弁当を囲みながら、わたしは仲がいい二人を見つめてる。

相手はもちろん西嶋君と成山君だ。

「あつ、巽！てめ、俺の最後のベーコンポテトっ」

「早いもの勝ちなんだよ？所詮この世は弱肉強食なんだから。でも可哀想だから航平にはこれあげる」

「サンキュ——ってミニトマトは安在が作ったもんじゃないだろ！」

「何言ってるの。安在さんが丹精込めて家庭菜園で作ったものかもしれないじゃない。てことはこのお弁当のなかで一番作るのに時間がかかってるよ。ね？安在さん」

「え？……わたし、家庭菜園はしてないけど」

「おまえ、でたらめばっか——あ！ベーコンポテトを食いやがったな」

「素直だよー、航平って」

ちよつと多かったかなって思ってたお弁当なのに、もうおにぎり一個しか残ってないんだけど……あ、西嶋君が取っちゃった。

なのでお弁当箱は空です。

完食！

しかもほんの数分でっ！！

弟もよく食べるけど、二人はそれ以上じゃない？

すごいなあ、男の子って。

見事な食べっぷりに驚いているわたしの視線に、西嶋君が「あ」と気づいたように言った。

「おにぎり、ほしかったとか？返す？」

「ううん、いいの。食べて食べて。それよりお弁当足りた？」

「ん、もうちょつと食べる気もするけど」

「俺はまだいけます」

そーっと成山君が西嶋君のおにぎりにお箸をのばしたところで、それに気づいた西嶋君はベチと彼の手をはたいた。

「お・ま・え・はー！これは俺んだ！」

大きく口を開けて……ひ、一口つてえ！

喉つめたりしないかな？

大丈夫？

「はー、うまかった」

もぐもぐ、ごつくんとおにぎりを飲み込んだ西嶋君の言葉にわたしは耳を疑う。

うまかったって言うてくれた！？

本当？

お料理とお菓子作りがわたしの唯一のとりえなの。

でもいままで家族以外に食べてもらったことがないから、実は微妙だったかどうかしうって思ってたんだ。

不味かったら顔を見ればわかるけれど、微妙な場合顔に出ないだろうし、お世辞でおいしいって言わせちゃうでしょう？

「すっげうまかった。ごちそうさま」

すっかり手を合わせるなんて躰が行き届いてるのね、西嶋君って……

……って、そうじゃなくて！

おいしかったって嘘じゃない？

喜んでくれたのかな？

「良かった。また作ってくるね」

「マジで？」

そう言った彼の顔が綻んだ。

わっ、嘘みたい。

笑ってくれた。

ニコニコするタイプの人じゃないから、こんなふうに時おり見せてくれる笑顔がもうたまりませんっ。

ああ、ニヤけちゃうううう。

「安在って料理得意なのな？」

「得意っていうか、お料理とかお菓子を作るのが好きなの。だから大学も家政学科を志望してる」

「ふーん、じゃ安西さん、航平と志望校離れちゃうね。家政学科のある大学って女子大でしょ？航平、理系に強い大学狙ってるよ。因みに俺は将来ネコ型ロボット作って、ネズミにも負けないストロングキャットにするつもり」

やっぱり西嶋君は理系の大学に進学するつもりなんだ。

予想はしていたけれど成山君の言葉にわたしは落ち込む。

「西嶋君は理系クラスだしわたしは文系だもん。進学先が違っってわかってるしそれに——」

わたしは我に返って口を閉ざした。

西嶋君とはすぐに別れることになるから仮に同じ大学になっても辛いだけ……。

落ち込んで、そうっっかり余計なことまでしゃべってしまうところだった。

「それに？」

西嶋君に促されてわたしは無理やり笑顔を浮かべ首を振る。

「うっん。いまから先のこと考えたって仕方ないよね」

お弁当箱や水筒を片付けてわたしは立ち上がった。

「次の授業の当番なの。先に戻るね？」

西嶋君たちに別れを告げて塔屋に飛び込む。

ネガティブになるな、わたし。

つきあっているうちにいろんなことをしようって決めたでしょ？

一緒に帰る。

お弁当を作って一緒に食べる。

もう二つも叶えた。

この次は……。

「図書館デート」

小さく呟いて頷く。

休日デートは憧れだったの。

普段学校じゃ見られない西嶋君が見れるといいな。

そんなことを思うとへこんでいたはずのわたしの気分が少し浮上した。

12 離姫視点

部屋中に服を並べてとつかえひつかえしながらわたしは鏡の前で悩んでいた。

チェックのシャツと7部丈パンツを自分にあてながら鏡を見て首を振る。

「ちよつとカジュアルすぎ」

じゃありボンキヤミにカーディガンを引っ掛けてスカートにしてみる？

でもこのキヤミ、胸のと思ったよりも開いてたんだっけ……。

「さ、誘ってるみたい」

ならこっちのノースリとボーダー重ね着して……なんか地味。

ええと、このワンピースは？

で、腰んとこベルトで締めて大人っぽくせめてみて——図書館で勉強するのに大人っぽくせめてどうするの、わたし!!

明日の図書館デートに着ていく服を選んでいたわたしは溜め息を吐いた。

もう、どれがいいんだかわかんなくなってきた。

西嶋君の好みってどんなだろう？

フェミニン？ カジュアル？ セクシー？

えーん、わかんない。

好きなおかずは学校でお弁当食べてる時になんとなくわかったけれど、女の子がどんな服装してるのが好きかまでは——。

ベッドにある携帯からメールを告げる電子音が鳴った。

誰だか確認してみると……あ、成山君だ。

そっいえばアドレスとか赤外線で交換したもんね。

初メールにちよつと驚きつつわたしは携帯を開く。

『航平の好みは控えめフェミニン。因みに俺はチラ見せが好き。だつて男の子だもん。んでチラ見せは航平にもかなり有効』

メールを読んだわたしが、ふつと笑つてしまった。

成山君、面白い人だつて思つていたけれどメールまで楽しい。

「男の子だもんつて」

くすくす笑いながらわたしはベッドに腰をおろした。

まるでわたしが明日の服装に困つてるのを見てみたい。

でもいいこと聞いたかも。

西嶋君の好みは控えめフェミニンか。

つてことはあまり女の子つく過ぎるのもよくないのね。

それでチラ見せ……けどチラ見せつて？

見えそうで見えないきわどい感じつてこと？

思わずリボンキャミを見てわたしは悩む。

成山君もメールで「男の子だもん」つて言つてくるくらいだし、やっぱりこういうのが好きなのかなあ？

わたしだつて弟がいるし、男の子がどういうものかちよつとはわかつてる。

わかつてるけど——初デートでこれを着る勇氣はわたしにはありませんっ！！

そのときふとわたし目にフリルのチュニックが目にとまった。

「これ……よくない？」

胸のところと裾がフリルだけれどそこまでブリブリしてないし、薄い生地だから中に一枚キャミを着るとしても、腕なんかはうっすら見えるよね？

ちよつと透けちゃうつていうこんな感じのほうか、チラ見せも直接的じゃないしいいかも！

じゃあこれに合わせるのはこっちのハーフパンツでどうかな？
あ、いい感じ。

勉強するんだし自然に可愛い感じがいいなって思ってたの。

あとは勉強の時に髪が邪魔にならないようにサイドを編みこんで…

…。

鏡の前で服を合わせ、髪型の想像をしてみたわたしは頷く。

うん、ばっちり！

成山君が教えてくれた西嶋君好みの控えめフェミニンに近い気がする。

さっそく成山君にお礼の返事をしなきゃ！

ベッドに座りなおしたわたしは携帯を手にとると成山君にお礼のメールを送る。

そのまま携帯を閉じかけ、思い直して手を止めると小さな画面を見つめた。

西嶋君にもメール送ってみようかな。

つきあってから毎晩、一通だけメールを送ることにしてみたの。

でもいつも返事は一言か二言だから、やっぱり迷惑なのかなあなんて頭をよぎって送るのを躊躇ってしまふ。

いーや、迷うなわたし。

これもつきあってる間だけの特権なんだから！

それに西嶋君は短くても必ず返事をくれる人だもの。

本気で迷惑だったら返事なんてこないと思うの、うん。

『西嶋君は苦手な食べ物ありますか？よければ教えてください。それからこれまでのお弁当に苦手な食べ物を入れていませんかでしたか？』

送信ボタンを押してからわたしは携帯電話を折りたたむ。

目下わたしの目標はもう少し碎けた文章でメールを送ること。

西嶋君といてもまだまだ緊張しちゃって、そのせいか文章まで硬くなっちゃうのが情けないなあ、わたし。

部屋中に並べていた服を片付けたわたしは、明日着ていく服をハンガーにかけた。

これでよし。

あとは明日の勉強道具一式、と机から受験勉強用の問題集をピックアップしていたわたしは、数学の教科書に指が触れて手をとめた。中間が赤点だったのを思い出して顔を顰める。

期末も赤点だとやばいぞー、って先生に冗談っぽく言われたけれど、このままじゃ笑えない状態になりそうだしどうしよう。

文系クラスなのになんで数学があるの、と泣きなくなったわたしはぺかんと脳裏に西嶋君が浮かんだ。

理系クラスの西嶋君はきつと数学は得意よね？

そういえば昇降口で木戸君の話を聞いたとき、お友達の人が西嶋君って教え方が上手って言ってなかった！？

わたしもわかりやすく教えてもらいたい……ていうかもらっていい？ ううん、ここは教えてもらうべきなんじゃないかな！？

わたしは迷ったあげく、受験用の問題集の上に数学の教科書を積んだ。

ついでに1、2年の頃の教科書と参考書も引っ張りだしてカバンに詰め込む。

ダメ元で持っていこう。

西嶋君が受験勉強を優先したいって言ったら諦めればいいんだし。

明日の用意が完了したところで携帯が鳴った。

西嶋君からの返信だ！

今日はいつもより長めの返事だといいな。
期待してメールを開く。

『ないから大丈夫』

7文字……今日の返事も昨日までと変わらずまた短文でした。
め、めげないもんっ！

* * *

図書館の自転車置き場でわたしは西嶋君に到着メールを送信し、前
籠から大きな荷物を取り出して肩にかけた。

参考書とか入ってるし重い。

図書館の入口に向かうため建物を回りこんだところで、向こうから
も人が来ていたのか危うく正面衝突するところだったけれど、相手
が素早く立ち止まってくれたのでかろうじて免れる。

「はよ」

声に顔を上げて相手が西嶋君だったためわたしは驚く。

「おはよう、西嶋君。びっくりした。もう着いてたんだね」
わたしも早めに家を出たつもりだったんだけどな。

メールしたから迎えに来てくれたとか？

まさかね。

自転車に忘れ物でもしたのかな？

でもなぜかフリーズしちゃってるのはどうして？

「どうかした？」

「や、眼鏡してないしコンタクト買ったんだなって」

「うん、昨日」

なんだ、眼鏡じゃないから気になったただけなのね。

「安在が気にするほど眼鏡変じゃなかったけどな」

「ホント？眼鏡嫌いじゃないの？」

「嫌いも何も俺、目はいいからかけないし」

「そういう意味じゃなくてね？」

「うん？あ、伊達眼鏡とか？服とコーディネートしてかけてる奴いるけど、俺、そういうのはしないな」

……えーとこれってどういうことなんだろう？

西嶋君はわたしの眼鏡姿が変じゃないって言ったよね。

それに目は良くて眼鏡も嫌いじゃないっぽい？

前にも話しておかしいなって思ったけれど、わたしなにか誤解してるのか？

「荷物、かして。持つ」

「え、あ……いいよ」

「弁当とかあつて重そうだから」

ん、と西嶋君が手を出す。

あれ？

もしかして……ううん、もしかしなくても西嶋君がここに来たのは、忘れ物を取りに来たんじゃなくて、わたしを迎えに来てくれたのっ！？

でもこれ重いのよ？

迷いながらわたしが彼の掌を見つめると、少し手を持ち上げてやっぱりカバンを渡すよう促された。

やだ、こんなことされたらわたし、本物の彼女みたい！

う、嬉しすぎて眩暈しそう。

胸中で叫びながら肩にあった荷物を西嶋君に渡したとたん。

「うわ、重っ」

「ご、ごめんね。参考書とか入ってるから。あ、勉強道具は別の力バンに分けて一緒に入れてるだけだから、それをわたしが持てば――」

「じゃなくてよくこんな重いもん持ってここまで来たよなって思っ
て。けっこう力持ちなのな？」

微かに笑ってそう言った西嶋君にわたしが見惚れていると彼は踵を返して歩き出す。

出遅れたわたしは彼を追っかけて、カバンを出してと言ったけれど話をそらされちゃった。

気にしないようにって気遣ってくれてるんだろうな。

その後、わたしが数学を教えてって言ったら、西嶋君は午前中いっぱい使って教えてくれた。

恥を忍んで中間が赤点だったって暴露した捨て身作戦がよかったみたい。

高1から順を追って教えてくれる西嶋君に何度見惚れそうになったことか。

そんな浮かれたわたしでも理解できちゃうくらい、西嶋君の教え方はとつてもわかりやすかった。

ちよつとでもわたしがわかんないって顔を見ると、よりわかりやすく式を展開してくれたり、もう一度説明しなおしてくれたり。

おかげでどこで躓いたのかもわかった。

わたしのノートに彼の書いた数式や文字がたくさん残ってる。
だからノートは一生の宝物にするって決めた。

心にためてる宝物とは別に、形に残る宝物がでちゃった！

メールの返信も消さないようロックをかけてるけれどノートのは直筆だもん。

レア度が違う気がするの。

13 離姫視点

「西嶋君、これどうぞ。数学を教えてもらったお礼」

お弁当を食べ終えて図書館に戻ってきたところで、わたしが自販機で買った苳ミルクを渡すと、西嶋君はちよつと戸惑つたような目を向けてきた。

「なんで苳ミルク……？」

「え？だつてよく飲んでるから」

学校で何度も見かけたもん。

これを飲むくらいだから西嶋君つて甘い物平気かな？

そう思つて尋ねてみるとお母さんとお姉さんが甘い物好きでケーキをよく食べるみたい。

じゃあ、あの質問してみようかな？

うずうずと西嶋君を見つめると、苳ミルクを飲む目が問うような眼差しに変化した。

「お菓子、作つたら食べてくれる？」

「食べる」

やった！

これもわたしのやりたいことの一つだったの。

お菓子を作つて食べてもらうつて。

「けど弁当とかお菓子とか材料費バカになんないだろ？今日も弁当食べといていうのもなんだけど無理ない程度で——」

「もしかして迷惑だった？」

これつて遠まわしにいらないうつて断られてるのかも。

そう思つて尋ねた瞬間。

「それはない！弁当はうまいしお菓子だつて食べてみたい。そこは誤解なしで！！ただ、毎日はやっぱ悪いつてか……材料費だけで

なく、弁当作るのに早起しなきゃいけないだろ？」

そんなの気にしなくていいのに。

「受験生なんだしその時間を勉強か睡眠に充てたほうがいいと思う。だから時々で充分」

「せっかく彼女なのに」

いまのうちにやりたいことやっておかなきゃ、時間なんてあつという間に過ぎちゃって、明日にでも「お別れ」なんてことになりかねないものっ！

だからお菓子作るうゝ。

絶対譲りませんって思いながら西嶋君を見ると、彼は少し考えるような素振りを見せてから口を開いた。

「あの、さ。もっかい公園戻って散歩——」

「え？」

いきなり話が変わったため一瞬、西嶋君が何を言い出したのかわからなかった。

公園で散歩がどうしたの？

「——とかはしたくないよな。勉強しに来てんだし」

「行くっ」

わたしの返事の素早さは0コンマって世界だったと思う。

だって初めて西嶋君が誘ってくれたんだもの。

どんな心境の変化だろうと、気の迷いだろうとかまわないうっ。

「行きたいっ！！」

嬉しい、嬉しい、嬉しいっ！

お腹がいっぱいになると眠くなったりするし、食後の運動をしたいのかもしれないけれど、それをわたしと一緒にって思ってくれたんだもん。

わたしの返事を聞いた西嶋君は苺ミルクを飲み干すと、ゴミを捨てた後わたしに右手を差し出した。

「繋いでく？」

きやあ！

こんな夢みたいなことあっていいの！？

「うん」

ためらいがちに手を伸ばすと西嶋君の手がしっかりとわたしの手を握ってくれた。

嘘みたい。

わたし、西嶋君と手を繋いでる。

うわ、緊張してきちゃった。

手に汗をかいたらどうしよう。

「な、なんか照れるね」

「言うな」

即座に言われてわたしはビクつく。

なんか怒らせた……？

「あ、ごめ……」

「余計に緊張する」

へ？緊張してるって言った？

じゃあぶつきらばうな返事はそのせいなのかな？

「嘘、西嶋君も緊張してるの？沈黙へいきなのに」

「それとこれとは別」

指摘すると西嶋君はわたしから目をそらすように歩き出した。

ねえ、もしかして西嶋君も照れてるの？

もつと顔をよく見せてくれなきゃわからない。

そんなわたしの願いが通じたのか、彼がわたしを見下ろしてくる。

でもお互いの視線がぶつかったとたん、妙に気恥ずかしくて自分から勢いよくそらしちゃった。

うわ、これ感じ悪いよね？

怒ってないかな？

そうつと窺うように顔を上げると……あれ？

なんか西嶋君も顔を背けてたっばい？

今度もまた目が合って、なんだか二人して笑っちゃった。

なんだ、西嶋君もわたしと一緒になんだ。

そう思うと嘘みたいに力が抜けた。

「西嶋君の手おっきいね。公園まわってる間、繋いでていい？」

だからこんな大胆発言までしちゃったの。

返事はなかったけれど、繋いだ手に力がこもったからいいってことなんだろう。

あなたの手は大きくて少しごつごつしてて、でもとっても温かい。繋いだ手を見つめてると嬉しくて自然に顔が綻んじゃう。

「安在はどんなものもらったら嬉しい？」

二人して黙々と公園を歩いてたら突然西嶋君が尋ねてきた。

わたしたち二人、どちらもおしゃべりってわけじゃないから、一緒に帰っていてもたいていこんな感じ。

最初こそ何かしゃべらなきゃってぐるぐるしていたわたしも、今じやすっかりこの静かな時間も楽しめるようになってる。

「え？プレゼント！？」

「ん。姉ちゃんがもう少ししたら誕生日なんだけど、どんなもんやったらいいかわかんねえからいらないよなっつたら、プレゼント寄越せって蹴り入れられた」

あ、なんだ。

わたしにじゃないのか。

それにしてもバイオレンスなお姉さんだなあ。

「甘い物好きなんだったら有名なケーキ屋さんのケーキとか、お菓子とか……」

「毎年弟とそれで済ましてたら誠意がないって去年却下された」
なるほど。

それで困ってわたしに相談してきたのね。

「じゃあ服とか？」

「趣味がいまいちよくわかんね」

「お花？」

「花知らないし自分の姉に花ってすっげ寒い」

「あとは小物とかカバンとかアクセサリーとか」

わたしが纏めて提案すると西嶋君は「だよな」と溜め息を吐いた。

「なんであいつのために、んなこっぱずかしそうなものを買に行
かなきゃならないんだ。女物のカバンとかアクセサリー選んでる自
分を想像できない」

首をふった西嶋君は「あ」とわたしに目を向けた。

「今度の休み、予定ある？なければ買い物つきあってくんね？」

「行く！」

わたしは反射的に返事をしてた。

うわあい！来週も西嶋君とデートだ！！

「ありがと」

ホッとしたようにそう言った西嶋君がお礼とともに笑顔をくれる。

くう、こんな無防備な笑顔向けてくれるなんて。

写真！、写真撮らせてほしいつつ！

この際携帯でも——とカバンに手を伸ばしかけ、わたしは我に返
った。

だめだめだめ、いきなり写真撮らせてって言ったら絶対引かれるか
ら！

「西嶋君のお姉さんがどんなもの好きなのかリサーチしてね」

「ん。姉ちゃんの持ち物適当に写真とってメールする」

「え？プライベートなものだし——」

「知らね。プレゼント寄越せつつたあいつが悪い。——やーこれで肩の荷が下りたわ」

「ちょ……西嶋君も一緒に選んでよ？わたしにお任せはだめだからね！こういうのは相手を思っで選ぶ気持ちが大事なんですっ」

言い切ってしまったからわたしは冷や汗が出そうになった。

まずーい、ついお説教臭く……ウザイとか思われちゃったかな？

わたしを見下ろす西嶋君は少しあって、ふ、と微笑んだ。

「わかった」

うつぎやあああ！

なにこれ、なにこれ、なにこれ。

なんだか日増しにわたしに向けてくれる笑顔が増えてる気がする。

しかも今のこれは——うわああん、すっごく写真に撮りたいいい！！

わたしの目が今だけファインダーになってくれますように。

そう願いながらわたしは西嶋君の素晴らしく可愛くて素敵な笑顔を脳裏に焼きつけた。

14 難姫視点

その日、3時間目が終わる間に携帯電話にメールが入った。
成山君からだ。

先生の目を盗んでこっそり内容を確認すると。

『航平が屋上で討ち死に中』

討ち死に？

今日、西嶋君の姿が見えなくなって思っていたけれど、ずっと屋上にいたの？

でもなんか変……西嶋君ってこんなふうには授業をサボるタイプじゃないと思うの。

もしかして何かあったのかもしれない。

ちょうど4時間目は自習になってるし、お弁当持って様子を見にいいのかな。

わたしじゃ力になれなくてもせめてお弁当で元気になってくれたらいいもの。

休み時間になってわたしがお弁当を持ちながら、親友二人に屋上に西嶋君がいることを伝えたら、彼女たちはニヤニヤ笑いで「いつてらっしゃい」って送り出してくれた。

その目、やめて！

成山君もいるはずだし屋上で二人つきりになるわけじゃないんだからねっ。

「あ、来た来た安在さん。俺、ちょっと別の漫画取りに行ってくるから」

わたしが休み時間になったら行くって返信してたから、成山君は来

るのを待つててくれたみたい。

漫画を手にいそいそと塔屋に消えてしまった。

本当に漫画が大好きなのね、成山君って。

彼を見送っていたわたしは視線を足元へ向け、かぶりつくようにしやがみこんだ。

なんって無防備な寝姿なの、西嶋君つつつ。

風に揺れる黒髪にわたしはそつと手を伸ばす。

ちよつと固めの髪なんだ。

うねうねした茶色いネコつ毛のわたしと正反対で、本当に真っ黒で羨ましいなあ。

まつげも結構長いし……スリーピングビューティ!!

あ、違った。

スリーピングキュート?

笑顔も可愛いけど、寝姿もいつもと違って油断した感じが……しゃ、写真!今度こそ写真撮らなきゃ!!

プライバシーって言葉が頭に浮かんだけれど——ごめんなさい、誘惑には勝てませえん。

一枚だけにするから許してっ。

カシャ、って電子音に西嶋君が目を覚ますんじゃないかって、慌てて携帯をポケットにしまう。

その判断は正しかったみたい。

だって西嶋君が目を開けたもの。

わたしを見てびっくりしたように飛び起きちゃった。

「あ、起きた?おはよう」

「安在?なんでここににいるわけ?もしかしてもう昼!?」

「うつん、まだ。成山君にメールもらったの。西嶋君が屋上で討ち死にしてるからって——寝不足?それとも気分悪いの?」

体調が悪いなら保健室に行ってるはず。

それをしないのはきつと別の理由だね。

でも何かあったのって尋ねても答えてくれない気がした。

だからわたしは直接的な言葉を避けて尋ねて反応を見ることにした。

「ちよつと気分的にダレてサボってただけだから。それより巽は？」

確かに誰だっって気分が乗らない時はあるけれど……信じていいのかなあ？

西嶋君の顔を見ても嘘か本当かよくわからない。

ここはやっぱりもう少し様子見が必要ね。

「別の漫画を持ってくるって教室に行っちゃた。すぐ戻ってくると思う」

日陰にお弁当の入ったカバンを置くと西嶋君が不思議そうに目を向けてくる。

「何してんの？」

「少し早いけどお弁当の用意。うちのクラス、次は自習になったからわたしもここにいる」

「や、いくら自習でも教室にいないとマズイだろ」

「じゃあ西嶋君は？——何かあったの？」

わたしだけ教室に帰らせようとしている気がして、様子見のはずがついズバリ突っ込んで尋ねてしまった。

彼は少しあつて笑顔を浮かべる。

「わかった。ちゃんと授業受ける」

「西嶋君、わたし授業に出てとかそういうつもりじゃなくて——」

「ちよつとやなことがあつて不貞腐れてただけだから」

「嫌なこと？」

「ん。でも寝たら復活した」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

「嫌なこと」をわたしに話してくれる気はないんだ――。
そう思うと悲しかったけれど仕方ないって思い直した。
西嶋君にとってのわたしは要らない彼女だもんね。

そういえばつきあってもう二週間が経つけれどわたしはいつ振られるんだろう？

「ありがとな」って言って荷物を持ってくれる西嶋君は、いつもどおり優しくて変わらないから……わたしにはその時がいつなのか全く予想もつかないの。
もうすぐ？

それともまだ先？

西嶋君と並んで階段を下りながら、そんなことを考えていると気分が落ち込んでくる。

「安在」

2階に降り立ったところで彼に声をかけられ、わたしは暗い気持ちになんとか無視して顔を上げた。

「なに？」

「放課後、ちよつと話があるんだけどいいかな？」
ドキリとした。

わたし、予知能力でもあったかな？

西嶋君の話って別れ話しか思い当たらない。

「話って？いまじゃ、駄目なの？」

「ん、大事な話だから」

わたしの馬鹿……今で余計に確信しちゃったじゃない。
とうとう言われるんだ。

「そ、そっか」

やだ、泣きそう。

泣いたら西嶋君を困らせるのに。

そこへほのぼのとした声が割って入った。

「あれ？自主休講はもう終わりなの？もっと青春を謳歌しようよ」
漫画を手にした成山君はわたしたちを見て珍しく表情を変える。

「どうしたの？」

成山君って実はけっこう鋭い人だって最近知ったの。

だからわたしは必死に取り繕った。

「なんでもないよ？あ、じゃあ西嶋君。4時間目が終わったらいつもみたいに——」

西嶋君の背後から近づいてくる人に気づいてわたしは言葉を失った。
相手が木戸君だったからだ。

昇降口でのがあつてから彼の顔を確認したから間違いない。

なんでこっちに近づいてくるの？

まさかまた、西嶋君に意地悪なことしようって思ってる！？

彼は嫌な感じの笑みを浮かべ西嶋君に目を向けた。

「よお航平、もしかして授業サボってたのは彼女と校内デートするためか？」

「安在、巽と先に教室戻ってくれ」

西嶋君がわたしを背中に隠すのと同時に成山君がわたしを呼んだ。

「行こっか、安在さん」

「え？あ……うん」

でもこのまま放っておいて大丈夫なの？

なんだか様子が変だもの。

そう思っても背中を向けている西嶋君の表情は見えないし、ここに
残れる雰囲気でもない。

後ろ髪を引かれながらわたしは成山君のほうへ歩みを進めた。

「ちよっと待って、安在。俺、面白い話知ってるんだけどさ」

そう言っただけで西嶋君を見る木戸君の目がどこか愉しげだ。

「黙れ、泰治。——巽、安在連れてけ」

木戸君の腕を掴んだ西嶋君の声音が変わっている。

いつもからは想像もつかないほど低い声に驚いて、わたしは反射的に彼を見上げた。

「なんだよ、俺が悪者みたいじゃね？俺はただ真実を安在に教えてやろうとしてるだけだろ」

「黙れつつってんだろがっ！」

ああ、そういうことか。

木戸君の台詞にわたしはやっと理解した。

きっと木戸君は自分の思惑通りことが運ばす、なぜか西嶋君がわたしとつきあってるから、全部ばらしてこの関係を壊そうとしてるんだ。

西嶋君だって彼に脅されて告白したなんてわたしに知られたくないんだろっ。

だから木戸君を止めようとしてるのね。

放課後別れ話を切り出すつもりだったんだろっし、余計なことを知られず穩便に別れたいってところなのかな。

この辺りが引き際でいいのかもしれない。

睨み合う二人を見ながらわたしはそう判断した。

二人が喧嘩になる前に幕引きはわたしがしよう。

「はっ、必死だな。安在、よく聞けよ。こいつがおまえに告ったのって——」

「知ってる」

その言葉に3人が一斉にわたしを見たのがわかった。

訝るように眉を寄せている西嶋君にわたしは笑ってみせる。

「全部知ってるよ、わたし」

こんなに驚いた顔をした西嶋君を見るのは初めてかもしれない。

涙が浮かんできそうになるのを堪えてわたしは両手を拳に握った。

「大事な話は人のいない場所でするものだよ、木戸君？」

木戸君を見据えると彼は一瞬顔色を変えたけれど、すぐに愛想笑いを浮かべる。

ただその眼差しはわたしが何を知っているのかと探っているのがわかった。

「安西？なに言ってる——」

「ネタならあるんだけどな？」

あの日、彼が使ったキーワードを意味深に言ってる。

震えるな、わたし。

ここで木戸君に気迫負けしたら終わり。

ほら、今度こそはつきり顔色を変えたじゃない。

ここで彼の弱みを握っておいて、今後西嶋君に手出しさせないようにしておかなきゃ——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030y/>

嘘つきは誰だ

2011年12月10日11時00分発行